

KSKQ **ファーストラン!** **FIRST RUN!**

—多くの仲間とともに現在を変え未来を創造するために—

NO.101
2017.3



アートサークル「ミントアンサンブル」のある日

特集

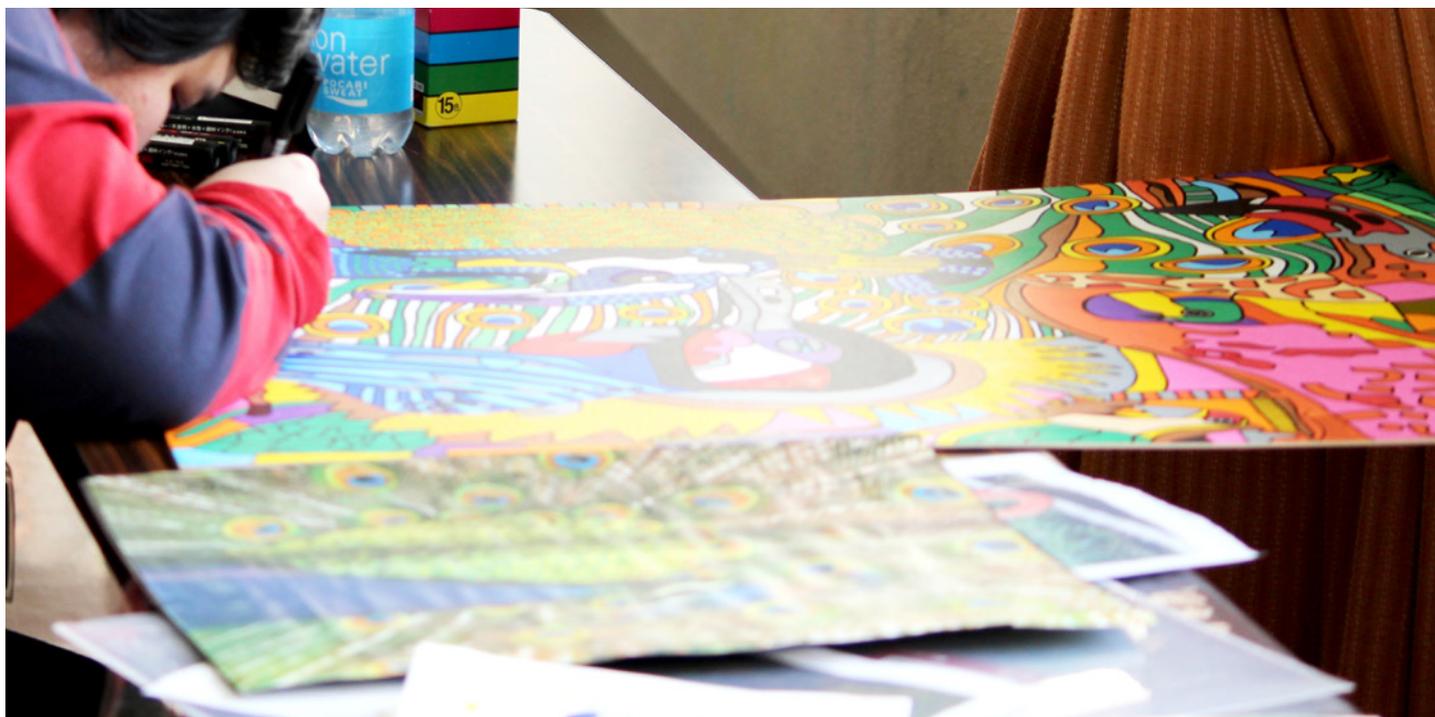
ファーストラン 100 号記念企画

推進協座談会第二部

2016 年度 対市交渉報告

編集：特定非営利活動法人 箕面市障害者の生活と労働推進協議会

<http://www.suisinkyō.com/>



■ CONTENTS ■

3 ファーストラン 100 号記念企画

推進協座談会 第二部

33 2016 年度 対市交渉報告

34 カエルのうた

35 常勤スタッフ & 登録ヘルパー大募集!

37 編集後記

「絵をかくのが好き」

絵画サークルのみんなは、本当に絵を描くのが好きです。私が見ているグループは自分が描きたいテーマを自分の好きな画材を使って描いています。画材はペン、色鉛筆(えんぴつ)、アクリル絵具、クレパス等々。そして各々のテーマも昆虫、鳥、動物、人、架空の世界の住人、物語……と様々。一人一人自分の描く世界をしっかりと持っていて、個性にあふれています。そして、サークルの開始時刻には、もうすでに席に座り、どんどん描いていきます。作品に向かう集中力が素晴らしく、そして真剣!時折、鼻歌やひとり言も聞こえてきて、楽しい時間を過ごしているのが伝わって来ます。みんなの作品がそれぞれ、年を重ねるごとに進化(深化)しているように思います。メイプルホールでの作品発表会やコンクール入賞を目標に一生懸命、絵を描いています。(小野原の地域交流多世代センターでも描いている人もいます)

(西村^{にしむら} 典子^{のりこ}:アートサークル「ミントアンサンブル」講師)

ファーストラン100号記念企画 推進協座談会

ちょっと間違った記憶でも OK で

第二部 一措置制度から支援費制度そして、現在一

●はじめに

前回 100 号掲載の座談会第一部では、主に当法人の団体設立までの話でしたが、今回 101 号では、団体設立後から現在に至るまでを制度の話などを絡めて進めていきます。

第一部の内容を振り返ると、1981 年国際障害者年に、市民を中心とした国際障害者年箕面市民会議が設立され、その市民会議のメンバーが、出会った障害者たちの生活と労働をなんとかしようと、制度も保障もない中で奮闘し、その流れで推進協が団体設立された時代の話でした。

第二部では、制度がない中、無償で介護するグループを結成して、どのように 24 時間介護に近づけるかを追及したり、制度ができて思うようにいかない問題があり、運営するために苦肉の策を考えたりと、まだまだ苦難の時代が続きます。そして、現在。これからの推進協をどう考えるか……。なお、第一部と第二部で、参加されているメンバーが違うこともあり、重複している内容も多少ありますがご了承ください。

日本の箕面という小さな町で、障害のある人を中心にして活動してきたこのような小さな歴史があったことを知っていただき、少しでも何か感じていただけたら幸いです。

『推進協座談会第一部 一国際障害者年と推進協設立一』も読めます

前号『ファーストラン! NO.100』にて掲載しています。当法人公式 Web サイト内のページにアクセスしてください。フルカラー PDF でご覧いただけます。本紙をより楽しんでいただくためにもぜひご一読ください。

<http://www.suisinkyō.com/first-run>

●座談会第二部 参加メンバープロフィール



むとう よしかず
【武藤 芳和】

大阪出身。100歳まで生きる気満々の59歳。おとめ座のA型。1981年に豊能障害者労働センターの事務局長、1990年にパンハウスワークランドの事務局長を経て1993年に当法人の事務局長となる。現在、当法人の理事長。好きなものは旅行、お酒、カラオケ。カラオケの十八番は虎舞竜の「ロード」！本人曰く、「脳出血の影響もあり何でもすぐに忘れるが、嫌な事はずっと憶えている」らしい(笑)。座談会第一部でも参加しています。



かじわら ふみお
【梶原 文雄】

愛媛出身。55歳。やぎ座のO型。22歳でサラリーマンになり、32歳で退職。心に思うことがあり、障害者福祉の仕事を模索。箕面の障害者運動の人たちと出会い、パンハウスで2年間勤務。その後、推進協に就職。通信編集、法人格取得準備、ホームヘルパー・ガイドヘルパー派遣コーディネーター、ミント(相談支援)の開所準備、送迎サービス等を兼務した後、現在のグループホーム担当となる。好きなものは旅行(温泉は必須)、体験した事のない事を体験する事。嫌いなものは蛇等の爬虫類。今、一番の興味は「退職後の自分の人生」。



ますだ としみち
【増田 俊道】

広島市出身。55歳。双子座のB型。1985年に箕面東高校に赴任。その後、1999年に池田北高校、2014年に豊島高校へ転任。大阪府立高校の社会科教員となって32年目。ZEROの家と当法人の理事も務める。好きなものはギター、バイク、忌野清志郎、奥田民生、広島カープ。嫌いなものは「日の丸」と「君が代」。長所も短所も「人生なんとかなると思っている」こと。今一番の興味は「退職後(あと5年)、何をするか」。



かたのさか かずゆき
【片野坂 和幸】

大阪市出身。42歳。いて座のO型。2000年4月に推進協に入職。以後、ライフタイムミントで相談業務に従事。好きなものは、スパイシーなカレー、LIVEを観に行く(SEKAI NO OWARI、高橋優、他、ジャンル問わず)、ハーモニカを吹く。嫌いなものはセロリ。比較のおおらかな性格。短所は人見知りなこと。今一番の興味は「瀬戸内寂聴の本を読む」こと。当法人の「サークルわてら」「楽団まぜぞせん」でも活動してまーす！

推進協のあゆみ

- 1993年2月 3つの障害者市民団体（労働センター、ワークランド、そよかぜの家）と市民が資金を拠出し設立。
（事務所はワークランドの2階）当会が行政との話し合い窓口となる。
- 1993年3月 自立生活をする障害者市民への介護派遣及びコーディネートを始める。
- 1994年4月 箕面市の登録ヘルパーとして介護派遣を始める。
- 1995年10月 事務所移転（箕面市箕面5丁目）
- 1998年3月 当会を事業所登録する。
- 1998年5月 5周年記念イベント『明日へファースト・ラン』開催。（講師に木之下孝利さん、入部香代子さんを招く。）
- 1998年12月 事務所を現住所に移転。
- 1999年4月 NPO 法人設立総会開催。
- 1999年9月 大阪府より NPO 法人の認証を受け法人登記を行う。
- 2000年4月 箕面市と箕面市在宅単身生活重度障害者ホームヘルプサービス事業の委託契約を締結。
- 2000年4月 箕面市と市町村障害者生活支援事業の委託契約を締結。
業務開始にあたって市町村障害者生活支援事業の専門部署「ライフタイムミント（通称）」を設置。
サービス圏域は箕面市・池田市・能勢町・豊能町。
- 2003年4月 支援費制度の導入。
大阪府より身体障害者居宅支援事業者の指定を受け4月事業開始。
大阪府より知的障害者地域生活援助事業者の指定を受け4月よりグループホーム 結開所。
- 2003年9月 当法人10周年記念イベントを開催する。
（講師：牧口一二さん、パネリスト：荒木邦公さん、今井雅子さん。らいとぴあで記念講演と懇親会）
- 2004年2月 中心人物の武藤さんが脳出血で倒れる。（3か月の入院、リハビリを経て5月に退院）
- 2005年5月 送迎サービス事業を開始。
- 2006年4月 大阪府より障害者自立支援法における指定障害者福祉サービス事業者の指定を受け事業開始。
- 2006年10月 制度改変（2005年11月の障害者自立支援法の公布）
共同生活援助事業（グループホーム）を共同生活介護事業（ケアホーム）に、
身体障害者居宅支援事業と知的障害者居宅支援事業を居宅介護事業と重度訪問介護事業に、
身体障害者外出支援事業と知的障害者外出支援事業を移動支援事業に移行。
障害者自立支援法における指定相談支援事業を開始。
- 2007年8月 大阪府より重度訪問介護従業者研修事業者の指定を受け、養成研修講座を開催する。
- 2008年2月 箕面市より移動支援従業者研修事業者の委託を受け、養成研修講座を開催する。
- 2012年6月 牧落のポプラハウスの一階に第2事務所を新設。
- 2012年8月 第2事務所にて、大阪府より児童福祉法に基づく障害者通所支援事業者の指定を受け事業開始。
- 2014年3月 相談支援事業・送迎サービス事業等を第2事務所から第3事務所に移転。
- 2014年4月 制度改正（障害者総合支援法）
共同生活介護事業（ケアホーム）が共同生活援助事業（グループホーム）に一元化される。

現在に続く……

●推進協座談会 第二部

【開催日：2016年10月21日(金) 場所協力：^{きそじ}木曾路箕面店】

カンカン照りのパン屋の2階

菊池：今回は推進協の通信100号記念という事で、座談会を開いて古くから関わりのあるスタッフの方とか会員の方とかいろんな方をお呼びして、これまでの推進協に関してお話をさせていただき、それを載せるということになりました。一部と二部に分かれてするんですけど、今回は二部ということになります。一部では設立前と設立までのお話なんですけど、今回は設立してから現在に至るまでの推進協を振り返るということになります。私がこの『推進協のあゆみ』(本文5ページ)を読み上げながら順番に推進協の今までを振り返り、皆さんに色々質問をしながらお話を聞いていこうと思っています。まずは飲み物がそろったので、とりあえず乾杯ということで。

一同：よろしくお祈りします(乾杯)！

菊池：では、早速始めていきますがよろしいでしょうか？

一同：はい。

菊池：推進協は1993年の2月に3つの障害者団体、労働センター(注1)とワークランド(注2)とそよかぜの家(注3)と市民が資金を拠出し設立されています。最初に設立された時の事務所っていうのが武藤さんからもお聞きしてたんですけどパンハウスの2階でスタートしたんですね。

武藤：はい。

菊池：その時の思い出というか、心に残っている出来事とかありますか？

武藤：パン屋の2階ですからね、めっちゃくちゃ暑かったんですよ。

菊池：1階でパンを焼いてるから？

武藤：1階でパンを焼いてますでしょう、そんでカンカン照りでしょう。夏なんかホンマめっちゃくちゃですよ！汗をかいて紙に手をこう置いたら紙が浮き上がってくるんですよ！

菊池：(笑)。

武藤：あれは酷かった。

増田：エアコンとかなかったんですか？

武藤：ありましたよ。途中からつけましたけど、今のと違って力が弱くて、なんの感触もない！風が吹いてるような気がするだけ！あれは酷かったね。電気屋さん曰く、「象とアリが闘ってるようなもんや」と言っていました。

増田：広いところに普通の小さなエアコンという。

武藤：そうです。金がないから、なんせあれは無駄やったです。

菊池：涼しくしようとしてホースで水を流したっていうのをお聞きしてるんですけど。

武藤：これは本当は言うっちゃあかんと言われとったんですけど、あんまり暑いからホースで水を流しとったんですよ。ほんならね、しばらくして請求書が届いたら7万円ついとった！それから速攻で止めましたけどね。

菊池：結構大変な事務所の状況から始められたんですね(笑)。

武藤：水ってそんなに高いと思ってないですよん、なんぼなんでも。

菊池：梶原さんが入られた時も、そのパンハウスの2階でした？

梶原：そうですね、私が入った時も2階ですね。武藤さんが言われたように、屋根から水を流して少しでもね。確かタンでしたね。



^{きくちこうじ}進行役：菊池康治。推進協ではグループホーム運営を担当。

武藤：確かそうでしょうね、プレハブやから。
 梶原：そうですね、すごく熱がありまして。確か水道の取り付けして下さったのは小田^{おだ}さん(注4)がしてくれまして……。あの、焼け石に水ってやつで(笑)。
 一同：(笑)。
 武藤：まさにそうです。
 梶原：なんの効果もなかったですね(一同笑)！

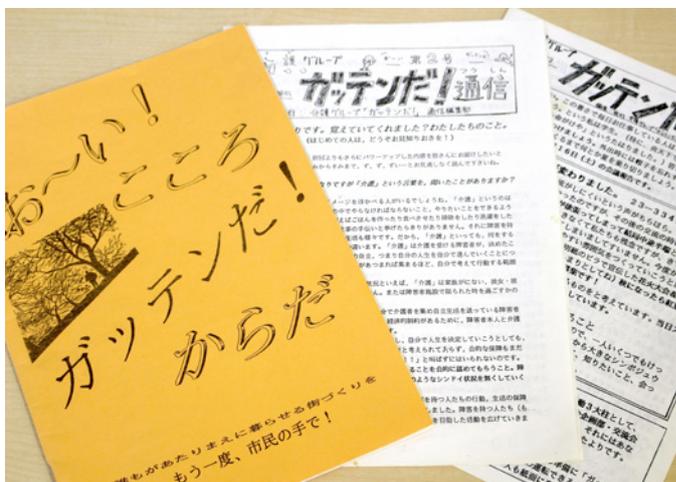


(注1) 豊能障害者労働センター：卒業して行き場のない障害者の働く場として1982年に誕生した事業所。当初は6人でスタートしたが、現在は60人の大所帯に。リサイクルショップや食堂を運営。<http://www.tumiki.jp/>
 (注2) ワークランド：パンハウス・ワークランド。障害者の働く場として1991年に設立されたパン屋さん。当初は5人でスタートした。現在は、ぱんきいワークランズも運営。<http://panhouse-workland.org/>
 (注3) そよかぜ：NPO法人そよかぜ。1985年に市内の中学校を卒業した一人の少年の進路をめぐって教職員と市民が協議をして生み出された箕面^{おだこういち}で最初の作業所。就労継続支援B型事業所としてリサイクルショップの運営や陶器制作・販売などを行っている。<http://nposoyokaze.org/>
 (注4) 小田さん：小田幸一^{おだこういち}さん。声がかかればどこにでも駆けつける左官屋さん。

「ガッテンだ！」結成

菊池：まあ、そんな過酷な状況からスタートした推進協なんですけど(笑)。当時も障害者の方の生活をサポートするためにヘルパー派遣とか、介護する方を派遣するっていうお仕事を中心としてやっていたのでしょうか？
 武藤：そうですね。ただ、当時は無償やったからね。タダで人を集めるといけなかったから、なかなかそれで来ませんわ！
 菊池：実際、集めるっていうのは、どうやって集めてたんですか？
 武藤：ビラを撒いたり、人づてとかで来てもらうんですけどね、なかなかそんなに人は集まりません。
 菊池：集まらなかったら、どうされてたんですか？
 武藤：だから「ガッテンだ！」というグループを作って。あのう、なんちゅうんですか、わりと暇な人とかいるじゃないですか。
 一同：(笑)。
 菊池：暇な人(笑)。
 武藤：そういう人たちが集まれる場所みたいなのをね。声かけたら何人か来たんですけど。

菊池：「ガッテンだ！」って名前が出てきましたけど、この『推進協のあゆみ』には「ガッテンだ！」のことは書いていないんですけど、通信の最初のほうでは「推進協の会員が集まり具体的に介護活動を行い仲間を募っていきましょう」という説明が書いてありました。
 武藤：あっ、そうですか。
 一同：(笑)。
 菊池：実際のところはなかなかヘルパーさんが集まらないので、暇を持って余している人を集めて介護グループにしたって感じなんですか？
 武藤：当時はね、ヘルパーなんていませんでしたから。無償ですから。「介護者」なんですよ。



市民の協力を広く募るために発行していた『ガッテンだ! 通信』。
 1993年～94年頃のもの。
 (当時「ガッテンだ!」に参加していた現理事・高岡紀美子^{たかおかきみこ}さん提供)

菊池：介護者……。増田さんも当時は「ガッテンだ！」のメンバーだったんですか？

増田：う〜ん……。、「ガッテンだ！」って、何年にできたんですか？

武藤：そんなこと私が憶えてるわけがない！

一同：(笑)。

増田：推進協ができてすぐでした？

武藤：そうです、そうです！

増田：は〜ん。

武藤：93年……。

増田：今、僕、昔からの記録を見直してみると、僕が箕面東高校で働きだしたのが85年なんですね。で、85年に^{まつうちあきひろ}松内秋弘くん(注5)が箕面東高校を受けて落ちたっていうんで、そよかぜの家を作ろうって話になったらしいんですね。で、その年に松内くんと一緒に受験した子らが箕面東高校に入ってきて、で、松内くんは入ってこれなかったけど、付き合うサークルを作りたいっていう話になって。で、その時にできたのが「ひまわり」っていう団体なんですけど。その「ひまわり」っていう団体は実際には障害のある人は入ってきていない段階で、そよかぜの家に行ったりとか、あと豊能障害者労働センター(以下、労働センター)はもうできてたので、労働センターに色々話を聞きに行ったりするようになって。で、話は教えてあげるけど代わりに介護に入れみたいなことで。

一同：(笑)。

増田：(笑)。そっからHさん(注6)の介護に入るようになったわけなんですね。で、教師だし、もちろんお金も貰えないし、月2回ぐらい泊まりで無料で介護に行き、話を聞く代わりに介護するみたいな感じになって。で、その翌々年にのちに推進協の理事長になった^{わかたけ}若竹さん(注7)が箕面東高校に入学したんですよ。^{とねやま}刀根山養護学校から受験をして入って、若竹さんを中心に「ひまわり」の活動が始まっていったんですよ。ちょっと最初にざっと話をしてしまうとね。で、90年にKさん(注8)という人が入学をして。で、初めてのケースだったんですよ。いわゆる「知的障害」のある人が普通学校に入って。まあ、定員割れの年だったので入るには入れたんだけど、進級とか卒業できるのか大議論になってですね。で、91年に「『障害』をもつ子どもの高校就学を支える会」っていうのを教師でつくって。で、生徒たちも色々交流したことで「高校生交流会」っていうのも91年にできてたんですね。そんな流れの中で、93年かな？武藤さんに、推進協っていうのを作って「ガッテンだ！」をやるから来てくれみたいな話で生徒と一緒にいって。で、生徒も入るし僕も入るっていう……感じだったと……思う。

一同：(笑)。

増田：その頃、武藤さんが色々な高校とか回って、「一緒になんかやりませんか？」みたいな感じで回って。僕、その頃は箕面東高校にいて、その後転勤する池田北高校とかも来はったと思うんですね。

武藤：ほんま？

増田：僕の連れあいが行ってた池田北高校の近くの細河中学とかも。

武藤：何となく憶えています。

増田：「武藤さん来たよ」みたいなこと言ってました。

梶原：武藤さん、エネルギーやったんですね。

武藤：そうですね。

菊池：その時で「ガッテンだ！」のメンバーって何人ぐらい？

増田：う〜ん、高校生交流会で一緒に行った子らが、10人弱ぐらい。

武藤：そんな、いましたっけ？

増田：他にも大学生とか。まあ、行ったり行かなかったりとかっていう子もいるから。そこで全部で10人ぐらい。



武藤：あっ、高岡さんもそうですね。

増田：高岡さんも。

武藤：こないだ言われて、「そうだったんですか!」と。

一同：(笑)。

武藤：全然憶えていなかったんですよ。

梶原：高岡さんがいたのは憶えていますよ。

武藤：ほんまですか？

梶原：うん、いましたね。

菊池：今、当法人の理事をされている。

増田：高岡さんの娘さんと息子さんは高校生交流会に来てはったんですよ。

菊池：その「ガッテンだ!」のメンバーで集まって、当時何名ぐらいの障害者の方を支援していたんですか？

武藤：あの時ってH以外は誰がいましたっけ？

増田：小泉さん(注9)は独自でやってはったのかな？

梶原：私が入った95年には5人いましたよ。Hさん、梶さん(注10)、小泉さん、大道さん(注11)、森田さん(注12)やったと思いますよ。5人ですね。

武藤：そうか、若竹さんは後で入ってきたんか。

梶原：若竹さんは後です。若竹さんは学校はどこに行かれてたんですっけ？

増田：箕面東から甲子園大学に行きはったんですよ。

梶原：その後に労働センターに行きはって、何年か勤めて自立しようという気になられて。当時、お手伝いをしたのが私やったんですよ。その時はHさんは箕面を出られた後やったから、入れ替わりで結局5人になっちゃったんですよ。

増田：ほ～、なるほど。

菊池：その5人の方って、重度の障害ですよ。

武藤：全員そうですね。

梶原：当時、私たちが言っていた「24時間介護保障をしろ!」って言った対象者は梶さんとHさんぐらいですよ。じゃあ、大道さんが24時間いるかっていったら、そうでもなかったし、森田さんもそうでもなかったし。小泉さんもスポット的に行ってたって感じだったから。「24時間介護保障!」って先頭に立って言ったのはHさんと梶さんを中心っていうことじゃなかったかな、ということですね。

増田：Hさんとこは24時間必要だけど、なかなか24時間なくて、間が空いてる時ってけっこうありましたもんね。

武藤：そうでしたっけ？

梶原：私、コーディネートしてたんですけど、介護者がいないから。

増田：前の人が帰って、2時間後ぐらいに次の介護者が到着みたいな。

梶原：ありましたね。Hさんところに介護者がおらへんから、「2時間ぐらい一人で大丈夫?」って言うて。で、Hさんは前の人が帰る時に色々済ませちゃうんですね。

菊池：は～。

梶原：トイレも済ませちゃう。テレビも4チャンネルにして、あと2時間4チャンネルを観るとかね(笑)。

一同：(笑)。

梶原：そういうふうにして、空白の時間を考えて。

菊池：それで繋いでいたという。

梶原：そうですね。

増田：私がHさんのところに泊まりで入った時も、翌朝は学校に行かないといけないから、8時過ぎには出ないといけない。次の人が来るのも10時ぐらいとかね。

梶原：そうそうそう!

菊池：24時間介助が必要な人でも、24時間態勢のヘルパーを派遣するのは難しい状況だったんですよ。



梶原：ヘルパーがいない。時間が合わないっていうのもあります。そんな感じでしたね。

増田：うん。

梶原：だから、増田さんが帰られたあとは女性の方が結構昼間は入っていた。だけど、女性が家のことをやってから来るようになったら、どうしても9時半とか10時になるよっていう方が多かったからね。それが多分、今の推進協の登録ヘルパーで、当時の人が数名残っているんじゃないですか。藤原さんとかもHさんとか知っているんじゃないですかね。

菊池：今でも当時のことを知っているヘルパーさんがいるんですね。

小山(スタッフ)：藤原さんが知ってるのは知らなかった。

梶原：あと、労働センターの池田まゆみさんのお母さんですね。

増田：小野さん(注13)もHさんの介護に入っていましたね。

菊池：小野さんって、あの小野さん？

梶原：(箕面市)福祉部長の小野さんね。

梶原：うん。あの当時は、今みたいに携帯がないから、全部電話で介護調整してたんですよ。

菊池：そうか、携帯がない時代ですよ、考えたら！

梶原：だから、職場とか家とか電話して確認せんとあかん。今と一緒に「来月、増田さんいつ行けます？」って。増田さんがOKだったら、調整して。でも、小野さんは電話してもなかなか出ない。

一同：(笑)。

梶原：(笑)。ただ、そういうど~のこ~のは置いといて、やっぱりHさんとの相性っていうのはありますもんね。よし悪しでね。

増田：うん。

菊池：ちなみに、Hさんってどんな方だったんですか？

増田：ぐふふっ(笑)。

梶原：ふふふっ(笑)。

菊池：(笑)。

増田：知らない方がいいのではないかと(笑)。

武藤：はっはっはっはっ！(笑)

一同：(笑)。

大野(スタッフ)：どういうことですか(笑)？

菊池：逆に聞きたい(笑)。

増田：うーん……凄い人だったんですよ、色々教えてもらって。「やりたいことはなんでもやっちゃう」みたいな人で。「箕面市を出て行った」というのも、言うたら「自由がなくなった」という。まあ公的に調整されるようになっていって、「自分で決められないっていうのが嫌だ」というのでしばらく大阪市の方に行ったんですね。大阪市はわりと自由度が高くて。で、そこでの生活もしてて。でも、それもなにかで行き詰まって、「もう東京行くわ」みたいな感じで東京で新たに介助者を見つけて、という。……まあとにかくそんな感じの人で。で、コンピューターをけっこう昔から使ってた。足で操作してはるんですけど。

菊池：ふーむ……。

増田：マッキントッシュかなんかのモニターみたいなのをやっていて、コンピューターをだいぶ教えてもらったんですけどね。で、とにかくそのHさんが、「高校生とかもドンドン連れてこい」と。「色々教えたから」みたいな。で、Hさんどこに行った高校生が、「もう嫌で二度と行きたくない！」みたいなことを言い出して(笑)。

一同：(笑)。

増田：何を言われたのかは知らないけど(笑)。で、そんなことを繰り返しながら、生徒もけっこう鍛えられていってますよね。

一同：ふーん。

菊池：今、Hさんはどうされてるんですか？

増田：今は東京にはいてはるらしい。

武藤：彼は元気なんですか？

増田：元気だと思いますよ。



あの小野さん

はじめに

1981年に始まった国際障害者年と時を同じくして、障害者の働く場づくり運動が市民の手で始められました。

12年前には何もなかった、この箕面の街に障害者の事業所・作業所ができ、不十分ながらも労働という面では一定程度前進したように思います。

しかしながら、障害者の生活、とりわけ自立生活を続ける障害者の介護体制はボロボロだし、介護を必要とする障害者が今から自立生活を始めようとしても、ほぼ不可能に近い状態なのです。

厚生省はヘルパー10万人体制を叫んでいます。けれども、過去にヘルパーさんを含む公的介護で、障害者が誰一人自立生活を始められなかったという事実が、量の拡大だけで解決するとはとても考えられません。ヘルパーさんの人数が少ないことで、逆に見え隠れしていた矛盾が量の拡大に比例し、巨大化した姿を現す予感がするのです。

障害者市民が、老市民があたりまえの市民として暮らしていくために、市民自身が考え、作り出さなければ本当の公的介護保障は実現しないでしょう。

その思いを一人でも多くの方々に知ってもらおうとこの冊子をつくりました。手作りで、雑なところが多く見られると思いますが行間に埋まった真実を心で感じとっていただきますようお願いいたします。

誰もがあたりまえに暮らせる街づくりを
もう一度、市民の手で！

(注5) ^{まつうちあきひろ}松内秋弘くん：発達遅滞障害のある箕面市民。現在、障害者事業団職員。

(注6) Hさん：本人希望によりイニシャル表示。豊能障害者労働センターの元事務局長で重度障害者。現在は関東に移住。

(注7) 若竹さん：^{わかたけいくこ}若竹育子さん。筋ジストロフィーの重度障害者。2006年～2011年に当法人の理事長を務めていた。

2015年に永眠。<https://www.facebook.com/ikuko.wakatake>

(注8) Kさん：ご家族の希望によりイニシャル表示。知的障害のある箕面市民。

(注9) ^{こいずみしょういち}小泉さん：小泉祥一さん。豊能障害者労働センター現代表。重度障害のある箕面市民。

(注10) ^{かじとしゆき}梶さん：梶敏之さん。豊能障害者労働センターで現職。重度障害のある箕面市民。

(注11) ^{だいでうひろこ}大道さん：大道ひろ子さん。17歳の時に交通事故で右手・右足を切断。色々な活動を経て、現在は箕面市人権啓発推進協議会や障害者市民問題啓発研究部会を中心に活動中。現在、当法人理事も務めている。座談会第一部にも参加。

(注12) ^{もりたまさき}森田さん：森田正樹さん。視覚障害のある箕面市民。当法人の利用者で、理事も務めた。また、箕面市の職員も務めていた。2011年に永眠。

(注13) ^{おのけいすけ}小野さん：小野啓輔さん。箕面市の職員。市役所の仕事の傍ら、当法人ができる前から障害者の自立生活介護に関わっていた。座談会第一部にも参加。

措置制度の時代

菊池：ちょっと『あゆみ』に戻りますね。1993年の3月に「自立生活をする障害者市民への介護派遣およびコーディネートが始める」ということで。たぶん、先ほどの話のように「ガッテンだ！」のメンバーとかで派遣を始めてたということだと思うんですけど。その後、1994年4月に「箕面市の登録ヘルパーとして介護派遣を始める」とってあるんですが。この「登録ヘルパーとして介護派遣を始める」とってというのは具体的にどういうことだったのかお聞きできたら。

武藤：すみません。私、その辺の記憶全くない！

菊池：えっ（笑）！

増田：すみません。そこ、僕も全然知らない（笑）。

梶原：えーと、私が入る1年前だと思うんですけども。たとえば、そうやってHさんとことか梶さんとかに皆が介護者として入ってますよね。で、その人たちに社協（社会福祉協議会）に登録してもらうんですよ。で、増田さんは先生やから……

それがアルバイトになるからできませんので、それ以外の方に「社協に登録ヘルパーとして登録してください」と。それで、みーんな社協の登録ヘルパーだったんです。

一同：ふーん。

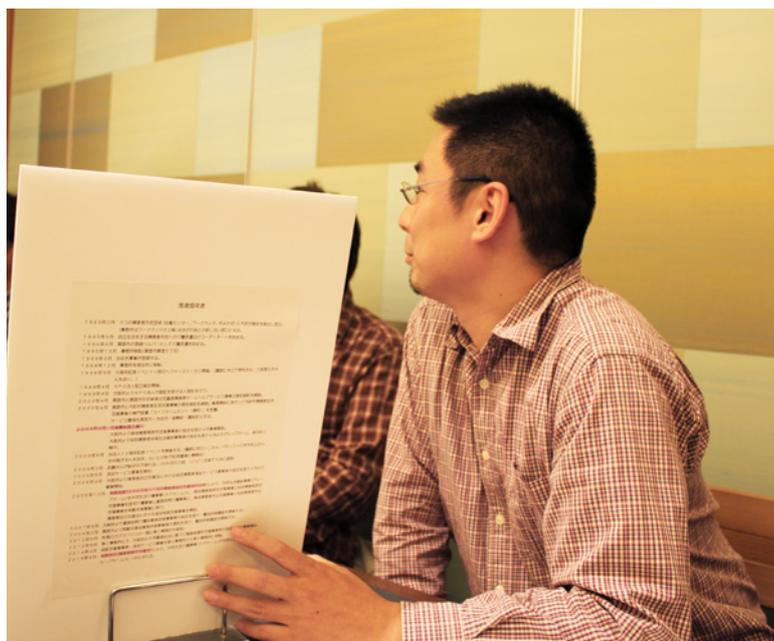
菊池：「措置制度」とってというのは、当時の社協が色々決めてたっていうわけですね。

梶原：そうですね。今の推進協にはヘルパーさんが沢山いらっしゃいますけども、今は「契約」やから利用者さんと契約して派遣ができますけども、当時は社協でしたから。推進協のヘルパーさん達はみーんな「社協のヘルパー」として登録して「社協のヘルパー」としてHさんのところに行く、という風なかたちにしてたわけですね。

菊池：ふーん。

梶原：それをやっていると、じゃあ「登録している人はお金が出る」。社協から給料を振り込まれますよね。増田さんは登録してないからHさんのところに入っても「お金が出ない」ですよ。

菊池：「ボランティアでやってる」わけだから……。





梶原：はい、はい。そこで武藤さんが考えたのが「こりゃ全部推進協でカネ吸っちゃおう！」と。

一同：(笑)。

菊池：「吸っちゃおう」と(笑)！

梶原：「吸っちゃおう！」と！『推進協のあゆみ』にもあるように、ワークランドと労働センターとそよかぜの毎月10万円の協力金しかお金がないんですよ。家賃も払えないし、水道光熱費も払えない、運営ができない。……ならばそのヘルパーで入った人たちの給料を全部吸い上げちゃおうと。

小山：はははは(笑)！

梶原：という策に出られたわけですね、武藤さん。

菊池：それ覚えてますか武藤さん(笑)？

武藤：えっ？ 忘れました。

菊池：あははははは(笑)！

梶原：だから、実質はヘルパーに入っている人たちは、お金は一銭も貰ってないです。

菊池：すべて、推進協の運営に。

梶原：推進協に「上納金」として納めたわけですね(笑)。

一同：(爆笑)！

大野：すごい……「上納金」って(笑)！

菊池：それ、使って良い言葉ですか(笑)？

武藤：こんなん言うとかヤクザ組織のようでしょ。

一同：(爆笑)！！

梶原：「上納金」として納めてたから、社協に登録してても誰もヘルパー料は貰ってないという。ただね、あるとなれば社協の源泉徴収票だけが来るといふ。

一同：(爆笑)！



梶原：「上納金」という言葉は悪いので……武藤さん、「リング」でしたっけ？「ミカン」でしたっけ？

武藤：何がですか？

梶原：「リングの木基金」！

武藤：えええ(笑)？

菊池：そういう名前をつけてたんですか？

武藤：そんなんありました？

梶原：うん。「上納金」言うたら言葉が悪いでしょ、だから「リングの木=カンパ」。

菊池：ムチャクチャ悪いですね(笑)。

一同：(笑)。

梶原：皆からカネを吸い上げて！

一同：(笑)！

菊池：「苦肉の策でやってた」っていうこと、ですよね(笑)？





増田：いや、でも介護者のほうもね、『お金をもらって介護をする』ってのは理念と違う」とっていう話をよくしてたんですよ。自分らは障害者の自立のために来て、さっきも言ったように代わりに色々教えてもらって、そこで金銭のやりとりってというのはあり得ない。だからお金が入ってくることにに対して介護者のほうも拒否してたってというのはあると思うんです。

菊池：今では考えられないですね。

坊野 (スタッフ)：通信の発行関連の団体がガーンと集まる^{かんていきょう} 関定協 (注 14) の総会の時に、他の団体さんも、「昔は無償でやるのが当たり前だったので、『むしろお金をもらうこと自体が信じられへん』みたいな感覚だった」と言っていました。

菊池：うん。

坊野：実際に聞いて、自分も啞然とした記憶があるんですけど (笑)。皆似たような感覚だったのかもしれないね。

増田：その代わり障害当事者のほうも必死だったそうなんですよ。「来てもらうためになにが伝えられるか」みたいなことを一生懸命考えた。

梶原：増田さんがさっき言うてはったように、たとえば H さんところとかっていうのは「セルフコーディネート」ですもんね。

増田：そうですね。

梶原：H さんが自分で介護者に電話する。

小山：ふーん。

梶原：もちろん全員がそうではないですけども、特に H さんなんかはそうでしたよね。

増田：うん。

梶原：全員に電話して。それでも埋まらないところは推進協に言ってきたりとかね。

増田：とりあえず電話がかかってきたら、みんな「どう断るか」みたいなことを考えてるんですよ (笑)。

一同：(爆笑) !

(注 14) 関定協：関西障害者定期刊行物協会。この通信を発行するのにも使われている、障害者関連の情報提供に関する刊行物を安価に郵送できる仕組みを各関連団体に提供している協会。

増田:「この日は空いてるだろうな」というのがバレてるから、「しゃあないなあ」という(笑)。

武藤:彼が電話してる時は、横で私が電話しとったんです。

菊池:Hさんの横で武藤さんが?

武藤:彼が、直接電話することもあるけど、ほとんどの電話は介護者がやとったんです。

菊池:それだけ当事者の皆さんが自分の生活を守るために必死だった、っていうことですよね。

増田:うん。

梶原:今はコーディネーターの人たちが日程調整してますけど、昔は当事者自身がやってたから、必死ですよね。だからさっきも言ったように「来てもらわなかったら困る」とか。

増田:うん、そう。介護者はいかにそれから「逃げるか」いうことを考えるんだけど(笑)。

一同:(爆笑)!

増田:でも、逃げれないから。「運命だから、しゃあないな」みたいな(笑)。まあ、そんな冗談も言いながら、やりましたねえ……。

梶原:最初だけですよ。「よしっ! 障害もった人のために行こっ!」て言うてたの。

増田:うん……(笑)。

梶原:もう、慣れてきたらイヤになってきますよね。

一同:(笑)。

菊池:「仕事」じゃなく「ボランティア」でやってるっていうのもあるでしょうね。

梶原:Hさんのところはハードでしたよね。

増田:まあねえ。

梶原:いつも寝るのが2時3時とかでしたもんね……。

増田:そうそう、Hさんが話をしだすと終わらない(笑)。

武藤:いつまで経ってもね(笑)。

増田:うん(笑)。

武藤:「もう早よ寝てくれよ」みたいな(笑)。

梶原:翌日仕事がある時とかはキツイですよ。2時3時まで引っ張られるから。

武藤:そうそう(笑)。

梶原:私も職員でしたけど、入るのイヤでしたもんね。しんどいから。

菊池:(苦笑)。

Q. 自立生活って?

A. 一般に言われる自立はひとのちからを借りず、自分だけのちからで生活することのようですが、障害をもつひとたちの自立はまったく逆で、自分のまわりにちからを貸してくれるひとを集めれば集めるほど、自立していけるのです。

今、介護を必要とするひとで自立生活をしているひとは、毎月介護するひとたちに電話連絡をして、日々の介護をうめています。これは障害をもたないひとには想像もできないシンドイことなんです。

だからこそ今、多くのひとたちのちからが必要なのです!

自立生活を続けているひと、自立生活を始めようとしているひとたちを支えていくには、ほんとうに多くのひとたちのちからが必要です。障害をもつひとたちが、ひととして、あたりまえに暮らせる街をつくっていくために、わたしたちの仲間になってください。

福祉の対象としてでなく

ひととしてあたりまえに暮らせる

街づくりを目指して

推進協、そして「ガッテンだ!」は

365日あなたをまっています。

「ガッテンだ!」のパンフレットにも当時のセルフコーディネートについての記述が。

(注15) ^{きのしたたかとし}木之下隆俊さん:先天性骨形成不全症で、同じ障害を持つ娘さんと広島で暮らしながら障害者市民運動を続けていた。2000年に永眠。

(注16) ^{いるべかよこ}入部香代子さん:「青い芝」などの活動や、1991年4月「全国初の車いす女性市議会議員」として当選してから4期16年、豊中市議会議員をつとめた事でも知られている。2013年に永眠。

「劇団ガッテンだ！」はあったのか？！

菊池：まだこれから支援費制度までいかないといけないので、ちょっと話を進めていきます。1995 年の 10 月頃に事務所が箕面 5 丁目に移転してるということなんですけど。その後、当会を事業所登録するということで、1998 年 3 月に事業所登録。で、さらに 1998 年 12 月に事務所を現在の住所に移転したということになっています。で、1998 年の 5 月に「明日へファーストラン開催」ということで講師に木之下隆俊さん（注 15）と入部香代子さん（注 16）を招いて 5 周年記念のイベントをしています。5 周年記念イベントのなにか思い出とか記憶とかってありますか？

一同：……。

菊池：特にない（笑）？

武藤：片野坂さんって、入ったの何年でしたっけ？ 5 周年はおらへんかった？

片野坂：僕、2000 年ですから……まだまだ出てこないですね。

菊池：片野坂さんの出番はもうちょっと先ですね（笑）。

一同：（笑）。

増田：あのう、劇をやったのっていつですか？

武藤：劇？

増田：劇。僕「ガッテンだ！」って劇団やと思ってました。

武藤：嘘やん（笑）！

増田：ほんま。なんか劇やってませんでした（笑）？

菊池：そう言えば昔の通信で「介護劇をやった」みたいなことがチラッと載ってましたけど。

武藤：まったく知らん！

増田：最初に誘われたのは「劇を一緒にやって」みたいな感じだったから。93、4 年ぐらいにそんなやってるんちゃうかな。で、そこであの Y 君とかけっこう活躍してた……えっ、覚えてないですか？「劇団ガッテンだ！」。

武藤：全然覚えてない（爆笑）。

菊池：（笑）。

増田：ええええっ？そう（笑）？

菊池：梶原さん、覚えはないですか？「劇団ガッテンだ！」。

梶原：いやー、知らないですね。

増田：あったはずですよ（笑）！

菊池：ははははっ（笑）。

武藤：ホンマですか（笑）？

坊野：なんか劇団って相性良いんですかね？今うちの職員の川上さんが「劇団でこじるしー」やってたりとか。他の団体さんでもあるんですよ。当事者の方々が情熱的なやつをやっていたりとか。

増田：うん。

坊野：感情に訴えかけるものが、あるのかもしれないですね。

増田：それって、車椅子のユーザーの方が車椅子のまんま登場して、その役を演じる、という。なんか「そのまんまいけるで」みたいな。

菊池：でも、見事に誰も記憶にないという（笑）！

増田：あれっ？？？

一同：（笑）。



自立支援型ホームヘルプサービス

菊池：『あゆみ』では抜けてますが、1995年の4月から「自立支援型のホームヘルプサービススタート」っていうのがあるんですけど。いったんはホームヘルプサービスで足りない時間を補うために、緊急時の時間のサービスとして自立支援型のホームヘルプサービスがスタートしたということが、当時の通信に載っています。そこらへん、当時の記憶とかお話とか、何かありますでしょうか？

一同：……。

菊池：あはははは、武藤さん笑ってるけど、知らない？（笑）

武藤：ははっ（笑）、今聞いて「そんなことがあったんか」と。

梶原：95年ですか？

菊池：95年。『あゆみ』には書いてないんですけど、95年の4月に「自立支援型のホームヘルプサービス」というのがスタートしてるんです。

梶原：ほな、その時私入ってますから、私いきましようか。ちょっとさっきね、さかのぼって悪いんですけど、「上納金」をね……。

一同：（笑）。

梶原：あの一、吸い上げてたでしょう（笑）？そこだけ聞いたなら「なんで吸い上げんのやろ？」と思うんですけども。先ほど設立当初、3つの団体が月々30万円を推進協に出してたという話がありましたね。10万+10万+10万で30万円を出してたんです。それで

武藤さんの給料と事務所の経費を払ってたんですね。でも、先ほど言ったようにコーディネートをしたり、どうのこうのってやってたら、武藤さん一人では推進協がたちいなくなっていく。で、「誰か人を雇わんとアカン」ということで、次に永田さん（注17）を雇ったわけですよ。

武藤：そうです。

梶原：でも、永田さんに払う給料はないんですよ、財源がない。だから、そのヘルパーさんからの「上納金」で。

菊池：（笑）

梶原：永田さんの給料とか武藤さんの給料とか……言うたら「推進協の運営費」にまわってたんですよ。

菊池：う〜ん……。

梶原：だから、そういう風にしてヘルパーの人たちが「自分のとこに入った給料を全て推進協に渡してた」っていうのは「推進協の運営費に使ってください」ということなんですよ。当時、推進協はそれ以外に収入がなかったんです。ヘルパーさんからの「上納金」と、3団体からの毎月の協力金。これしかお金がない。

菊池：まだ法人にもなってないから会員費とかもない？

梶原：ないです。推進協は事業所として、お金を手にする事業が何もないんですよ。それで、当時私たちは、「推進協は、これだけの障害をもった人のコーディネートを、派遣して、派遣調整とかもして、どっからもカネを貰えてないじゃないか！」っていうことを当時から強く言っていたんですよ。「運営できませんよ！」と。ということで、対市交渉なんかでそのへんをずっと言い続けた結果、国の制度で、自立支援……なんでしたっけ？

菊池：「自立支援型ホームヘルプサービス」。

梶原：「自立支援型ホームヘルプサービス」って国の制度で、あったんですよ。

武藤：それは「自立支援事業」と言うてたやつ……。

梶原：そうそうそう、「自立支援事業」というね。そういう事業があったんです。これを栗生さんくりおが見つめてきたんですよ。

菊池：栗生さん？（注18）

梶原：（箕面市の）障害福祉課の栗生さんという方が見つけていただいて、その当時課長補佐やった……奥山さんおくやま（注19）ですか、課長補佐でしたね、あの時は。

武藤：たしかそうだったと思います。



梶原：課長補佐やった奥山さん。この前まで、9月末まで（箕面市の）副市長だった方ですけどね。奥山さんが課長補佐で、すごく「なんとかしましょう！」と言ってね。行政マンにも「なんとかしよう」という問題意識がありましたよね。

武藤：いや、「なんとかしよう」と言うか……。

梶原：うるさかったからですかね？私達が。

菊池：はははははっ（笑）。

梶原：まあ国の「自立支援事業」というのがありますから、それで、推進協に委託して「推進協が実際にやってることとお金をマッチさせよう」というふうに行行政マンが考えてくれはったんですよね。ということで、なんでしたっけ？

菊池：「自立支援事業」と言われてました。

梶原：はい。

菊池：「自立支援型ホームヘルプサービス」。

梶原：はい。という風なことが。この国からその事業を引っ張ってきはったと。ただし、引っ張ってきた後に問題が出たのが、その「自立支援事業」というものができるのは「社会福祉法人等」。「等」ってというのが書かれているんです。

菊池：うーん。

梶原：推進協は「等」には入らないですからね。この当時はまだ、その辺の……。

菊池：民間団体？

梶原：任意団体っていうか、……「上納金」を吸い上げる団体。

一同：（笑）。

梶原：ここで「あらあ？」ということなんですよ。「引っ張ってきたはええが、推進協にこの事業委託できへんわ」と。そういうわけで、しゃあなしに社協にそれを委託したんですよ。

菊池：なるほど、そういうことだったんですか。

梶原：だから実際の契約になると、「委託者は箕面市」で、「受託者は社協」という風なもの。

菊池：うーん。

梶原：でも「その自立支援事業で働いている人たちは誰ですか」と言うたら、推進協のスタッフだったり、ヘルパーさんだったり、そこに名を連ねているんです。

菊池：ふーむ……。

梶原：ということで私が推進協の職員になった、というのはずーっと後なんです。私の出だしてというのは「箕面市社会福祉協議会の職員」なんです。

菊池：当時は……。

梶原：「非常勤職員」。

菊池：推進協の職員で入ったのに？

梶原：そうです。だから推進協のスタッフは社協の職員として給料を受け取っていた。で、さっき言うたように私も入ったわけでしょ。で、武藤さんとか永田さんの給料。まあ個別その分けた内容っていうと、「3団体の会費」と「上納金」で賄っていると。でも、「上納金」にも限度がありますから、「じゃあ私の給料はどうすんの？」って言ったら結局「あんた社協行ってよ」と。「社協から給料出てくるから。でも仕事は推進協の仕事です」という風に言われたんですよね。

坊野：書いて大丈夫なんですか、コレ？（笑）

一同：（大爆笑）！！！！

武藤：ダメだと思います（笑）。

菊池：えっ？ダメなんですか（笑）？

(注17) 永田さん：^{ながた}永田^こよう子さん。当法人設立2年目に専従職員になり、介護派遣やグループホームを担当していた。現在、箕面市障害者共働事業所^{くりおかつなり}たんぼの代表と当法人の監事と第三者委員を務めている。

(注18) 栗生さん：栗生勝成さん。箕面市の職員。1994年～2000年まで障害福祉課に配属。現在は箕面市営業部長。

(注19) 奥山さん：奥山^{おくやまつとむ}勉さん。箕面市の職員、副市長。(2016年退職)長年、障害者の活動に深く関わってこられた。

梶原：いや、そういうのは「書き方による」と思いますよ。

増田：うはははははっ (笑)

梶原：うんうん、「上納金」とかはアレなんで (笑)。うん、それを「カンパ」という言葉に変えてもらっても良いですね。

坊野：いやあ〜…… (笑)

増田：ははははははっ (笑)

一同：(笑)。

梶原：「みんなに支払われた介護料を、推進協に全額みんなカンパして」っていうことでしょうかね。「カンパ」って、実際みんなの通帳持ってましたからね、私。

大野：えっ!? そうなんですか!?

梶原：うん、登録ヘルパーの人の。だからいちいち「じゃあ皆さん社協の登録ヘルパーに入ってください」と言うて、皆さんの通帳に給料振り込まれるでしょ。で、毎月持ってきてもらうのが大変じゃないですか。「じゃ、通帳いらなかったら全部ちょうだい」と言うて。

一同：(苦笑)。

梶原：だから登録ヘルパーになるにあたって、個別、「その専用の通帳」を作ってもらったんです。で、印鑑と。

坊野：そんなにヤクザと変わんないっすね (笑)。

一同：(爆笑)!

梶原：そうそうそう、携帯とかアレと一緒にですよ、みんなの通帳集めて。ポォーン!とありましたね (笑)。

増田：まあ、対外的には問題あるとして (笑)。

一同：(爆笑)!

増田：でも、みんな納得してて (笑)。



梶原：そうそうそう、当時はね。

菊池：嫌でそうやってたわけじゃなくて (笑)、みんな「協力しよう」と思って?

増田：そう、納得してやってた。

武藤：みんな納得したうえでですよ!脅かしてやってたんっちゃいますよ!

一同：(爆笑)!

菊池：そりゃそうでしょう (苦笑)。

梶原：ただ要望としてはありましたけどね。「年間、扶養家族から離れないようにしてくれ」とかね。一生懸命それ計算してやってました。「迷惑かけないように」ということで。通帳はこんないっぱいありましたけどね。

武藤：暗証番号みんな一緒。

梶原：みんな一緒。「※※※※」ですね!

一同：(苦笑)。

菊池：それは書けないけど (笑)!

任意団体から NPO 法人へ

菊池：なんか、措置制度の制度って、あって無いような……それってやっぱり、苦勞して色々考えながらでない、やっていけなかった時代だったのかなあって。

梶原：推進協が独自で得る収入が無いんです。何もできない。自立支援事業もダイレクトに入ってきてないんですよ。「自立支援事業のスタッフの小山さーん、大野さーん、福永さーん、坊野さーん」って言って、そこにまた給与が社協から入るんですね。それをまた吸い上げるという。で、運営になる。藤原さんなんかは自立支援事業のスタッフの一人ですから、まだ覚えているんじゃないかな？「通帳預けてました？」って聞いたら、たぶん覚えてると思う（笑）。

一同：(大爆笑)！！

菊池：そういうふうヘルパー派遣をしていて、1999年の4月にNPO法人として認証を受け法人登記を行ったということになっています。当時、法人格を取るために、梶原さんは色々走られたって聞いているんですけど……、その法人格を得るきっかけみたいなのは覚えていますか？

梶原：その前の「1998年3月 当会を介護事業所登録をする」となっていますよね？結局1998年3月までは、私らは「ワケわからん団体」なんですよ。なんの名称もないし、個人商店でもないし、株式でも有限でもない。何でもないワケわからん人達が集まった団体だったけれども、先ほどの自立支援事業みたいに、社会福祉法人等とかみたいにやっぱり会社にしなないとこれからは色々な事業が推進協独自でできないんじゃないかっていう発想があって、98年3月に初めて事業所になったんです。いわゆる個人商店ですね、それは、^{かわのひでただ}河野秀忠さん（注20）が代表でしたね。「河野秀忠商店」というね。名前は違いますが、代表が河野秀忠。あと、従業員が4～5名というふうな。初めて事業所の登録になりましたね。任意団体から普通の個人商店に。

菊池：やっど、個人商店になった！

梶原：で、結局は事業所登録することによって人数も職員が4人も5人も増えてきたから職員のこと、もうちょっと。その自立支援事業とかでお金が入ってくるようになってきたからね。間接的に、もうちょっと職員のことを考えましょうというので事業所登録をした。事業所登録をすることによって、社会保険に私達は入れるようになったんです。だから、それまでの98年の事業所登録したのが3月でしょ。98年の2月まではワケわからん団体やからみんな個人年金なんです。で、健康保険も国民健康保険なんです。そんな時代がずっとありましたよね。武藤さん約6年間、私3年間で、その都度お金も入ってきたから職員のこともうちょっと考えるようにしましょうということで事業所登録になって、私達は初めて健康保険とか厚生年金に入ることができたという。

武藤：良かったですね。

菊池：それまでに5年ぐらい経ってるわけですね。

梶原：辛い時代でしたね。

増田：いや、でも今から思うとその昔の時代の方が楽しかったなという気はしますよ。なんでもアリというか、勝手にやってた。生活は大変だったと思うんだけど。

梶原：今みたいに縛りが無いですね。

菊池：思いというか、気持ちを優先してたとか？

増田：いや、みんなで「社会を変えてる」という意識があったから。「ないんだったら自分たちで作ったらええ」みたいな。

梶原：だから、当時はみんな見学とか来てましたよね。

武藤：学校とかからも来てましたよね。

菊池：そうなんですか！

梶原：まあ、そういうことで「任意団体から、ちゃんとした組織にしよう」、「いろんな事業を受託出来るように前準備しておこう」というのが事業所登録ですね。で、事業所登録になって、今度は個人商店からNPO法人になる。その経緯っていうのは、先ほども自立支援法の時に言いましたけれども、何か仕事を行政から委託してもらおう。そして、自分たちが何

(注20) 河野秀忠さん：70年代後半に箕面に移住して、箕面の障害者運動を先導してきた人。推進協が任意団体だった頃に運営委員会代表も務めていたことがある。障害者のための総合雑誌「そよ風のように街に出よう」の創刊時からの編集長も務める。その雑誌も来夏に惜しまれつつ終刊することに。

か事業を興すとなった時に社会福祉法人等の「等」じゃないとだめなんです。個人商店じゃダメなんです。法人格を持つことによって、その社会福祉法人等の中に入ろう。で、入ったらいろんな事業が直接推進協ができるだろうということを見込んで、NPO法人(を設立できる制度)ができた時に、いの一発で認証を取りに行っただけなんです。

武藤：予見というよりはね、今は副市長を辞めはった奥山さんが言ったんですよ。「NPO法人を取らんと委託事業ができへん」と。

菊池：法人格を取らざるを得なかったんですね。

武藤：それで生活支援事業かな？取れたんですよ。それぐらいから、片野坂さんが入ってくるんですよ。

菊池：そうですね。そうなってくると2000年になって、箕面市在宅単身生活重度障害者ホームヘルプサービス事業の委託契約を締結したと。

梶原：委託でしょ？法人やから、箕面市と委託契約をダイレクトに受けれる。色んな事業を受けれる。これがスタートです。法人になるための手段、それがしかなかった。水面下で動く団体じゃなくて、直接委託してうちが仕事をする。

ライフタイムミント

菊池：そこから、2000年の4月に箕面市と市町村障害者生活支援事業の委託契約を締結。業務開始にあたって市町村障害者生活支援事業の専門部署ライフタイムミント(以下、略称ミント)を設置。サービス地域を箕面市、池田市、能勢町、豊能町とする。ここでやっと片野坂さんが2000年の5月頃に入社してミントを担当されましたね。

増田：当時、片野坂さんはどこに住んでましたん？

片野坂：大阪市内の大正区。大阪市内の「ピア大阪」がピアカン(注21)の講座をしていた。それに行ったらたまたまKさんと細谷さんが講習受けてはった。僕は学校出て就職先がないもんでプラプラしていた。

増田：学校はどこに行ってましたん？

片野坂：龍谷大学の福祉学科を一応出たけれど、全然就職先がないからコネをつくらなあかんと思って、そういうところに顔を出していた。そしたら、たまたま隣に座っていて、ちょうどミントを立ち上げる時で社会福祉士資格を持った人が必要という話だった。僕はちょうど大学を出て資格を取ったところだったから、当事者でもあるし話がトントントンと進んだ。運命的な出会い。

菊池：そういう入り方だったんですか。



片野坂: そうなんです。だから、しばらく大阪市内から箕面まで車で通っていたんですよ。1時間から1時間半ほどかけて。箕面とはもともとそんなに繋がりがあつたわけではないんです。

菊池: 推進協に入ってちょっとして、もう一人暮らしされてますよね。

片野坂: そう。通うのがしんどいし。さすがにピアカンとしてずっと親元にいるのもどうかなという話もあつて。

菊池: 自立の話とかしてんのにと(笑)。

片野坂: 無言の圧力があつて(笑)。人には「自立せえ、自立せえ」と言っているのに自分は親元から通っていたら「それはどうなん?」みたいなことに。

菊池: 一人暮らしを始めた頃の話が、当時の通信にも書いてましたね。

坊野: ところで、「ミント」って名付け親はどなたなんですか?

片野坂: ミントはね、僕が入るちょっと前に武藤さんが連れてきはつたKさんという方がいて、その方が付けた名前だと思う。

坊野: 僕、なんで名前が「ミント」なんかになって思つてたんだけど。ある日どこかで見たら、「箕面・池田・能勢町・豊能町」の4つの頭文字から取つたと。うまいこと言うなあつて。

増田: 私もすごい名前だと思ひました!

梶原: あのう、片野坂さんが入る半年から1年ぐらい前から、私とKさんでミントの設立の準備をしていったんです。その時に「名前は何にしましょうねえ」ってKさんと相談して、結局それでいったんです。4つの市町村にね。ここだけの話、名付け親は実は私なんです。Kさんと話して「Kさんこれどう?」って。

菊池: 知らなかつた!

増田: 「ミント」ってすごく分かりやすい名前。箕面東高校から池田北高校に転勤して箕面から少し離れてたんだけど、箕面と池田と一緒にやり始めたんだと思つて。で、住んでいるのは豊能町だったし、「全部入つてるわ」みたいなんで嬉しがつた!



入職当時の片野坂さん。(当法人2000年度の市町村障害者生活支援事業受託記念講演「障害者の自立と自己決定」にて)

「ピアカン」

菊池：当初、ミントは片野坂さんとKさんとで？

片野坂：当初は武藤さんの中で思惑があったんですよね。ミントの相談支援事業を取ってきたのって。「推進協で障害者を雇用したかった」というのが。違いましたっけ？

武藤：そう。

片野坂：だから、障害者中心にスタッフを集めるってなって。まあ、「ピアカン」って言うてたんですけど。だから、Kさんもそうだし僕でしょ。で、当時は若竹さんと大道さんもいたし、上田舞さん（注 22）、視覚障害の杉山幸子さん（注 23）、聴覚障害の赤塚さん（注 24）。「障害種別肢体不自由、視覚、聴覚と、ひと通りピアカンを配置しましょう」とってやりました。今はちょっと違うけど。

菊池：今ね、ミントといえば障害を持たれてるのは片野坂さんですけど、ピアカンっていうのは当時は結構重要だったってことですか？

片野坂：当時はそういう制度だったんです。今はもうあんまり言わないですけど、制度上では当時はピアカウンセラーを配置することになってたんで、ミントはそれをしっかりやってた。

武藤：その頃は障害をもってる人がようけおったからね。

片野坂：ホームページ作りに週 1 回来る S さんとかね。

菊池：その人はどういう立場で？

片野坂：ミントの職員としてです。

梶原：当時は主たる職員として専従の片野坂さんとKさんの二人で、あとは非常勤よね？

片野坂：そうですね。週 2 回とか 3 回とか、顔を見ない日もありましたから。

梶原：S さんは来たい時に来てなかった？

片野坂：そうですね、自由度は高めでしたね。

菊池：そんな自由な来かた、アリだったんですか！？

片野坂：勝手に来てましたからね（笑）！

梶原：雇用契約なんかなかったから（笑）！

菊池：いいなあ（笑）。



左から若竹さん、杉山さん、大道さん（同じく 2000 年度の記念講演開催当時の皆さん）

（注 21）ピアカン：ピアカウンセリングの略。同じような立場や悩みを抱えた人たちが集まって、同じ仲間としておこなうカウンセリングのこと。同じ立場や体験をした仲間だからこそ分かり合える、あるいは、こころの支えになることができることを基本としている。

（注 22）上田舞さん：重度障害者で、当法人職員を経て、ヘルパー派遣事業所「ライフサポートネットワークいけだ」を立ち上げる。当法人の理事も務めた。2016 年 10 月に永眠。

（注 23）杉山幸子さん：視覚障害のある元当法人職員。現在は地元静岡に戻り、視覚障害のある人達が働く「ウィズ」に通われている。

（注 24）赤塚さん：赤塚裕子さん。聴覚障害のある元当法人職員。

駆け込み寺とセーラー服

菊池：確か昔のミントのホームページに、「障害者の駆け込み寺」というフレーズがついてましたけど、それはどういう主旨だったんですか？

片野坂：あ～(笑)、Sさんのホームページで最初に開いたらタイトルが「障害者市民の駆け込み寺」ってなっていて、お坊さんが出てきて木魚叩いてっていうね。それ

ね、Sさんのセンスです。強烈なセンス(笑)！

坊野：当時のミントホームページのデータ、検索したら残ってて観れますよね。

菊池：まだ、残ってるんですか？

片野坂：消してる、消してる！

坊野：一回拡散したものは残りますよ(笑)！

片野坂：「Sさんのたたり～」みたいな(笑)！

坊野：当時の職員の方から聞いたら、ホームページに置いてた掲示板にすごい差別的な発言を書いてくる人がいたり、クレームをあげてきた、とかいうようなこともチラッと聞いた気がするんですけど……。言い方が悪いかもしれないですけど、手間のかかることだったとしても、横着せずにかなり精力的にやった時代があるようだ。その頃のことで、何かないでしょうか？

片野坂：今ほど相談業務というのがカチッと確立されてなかったんですよ。だから相談っていても来ないですしね。そんなに。

菊池：意外と来ないんですね。なんか当時のほうがありそうですけど。

片野坂：来ないですよ。そんな怪しげな団体にわざわざ。

梶原：相談支援事業っていうことすらあまり皆さん知らなかったですもんね。

片野坂：知らないですよ。

梶原：私も立ち上げの半年と1年間はお手伝いさせてもらったけど、セールスやったもんね。あっちこっち回って。毎月しょっちゅう行ってたよ。

菊池：「何かありませんか？」とか？

梶原：うん。

片野坂：「何かありませんか？」とか、「〇〇の市町村の制度がどうなってるか？」とかね。調査して、メール打ったりとかね。

梶原：池田でもイベントやったよね。駅の近くでね。ミントを知ってもらおうということで駅前とかでやったよね。

片野坂：だって、それまでは役所に相談に行くもんやったから。今でもそうかもしれないけどそれが一般的で、そんなNPOや民間のところで相談を受けるっていうのは全くない時代で、行政もそんなにアテにしてない状況やったから。なんていうか、結構悩みながらやってましたね。

梶原：PRの時代やからね。「ミントここにありますよ！相談事業ここにありますよ！」って言ったのが最初の1年。結構、先ものセールス。「何かありませんか～？何かありませんか～？あったらここに電話してください」って言って。

菊池：当事者の方から必要とされてできた事業と思ってたけど、そんな感じじゃなさそう……。

梶原：暇やったもんね。ええ時代やったもんねえ。「何しよう～？」「制度勉強しよ～」「明日、どこにセールス行く～？」とか。

菊池：ちょっと、今では考えられないですね。

武藤：あの時ね、委託費かな？1,500万円あったんですよ。その結果、障害をもった人をようけ雇うことができたんですよ。

菊池：それはそれで良かったんですよ。

梶原：それまではヘルパー派遣ばかりだったからね。ヘルパー派遣だと障害がない人ばかりがコーディネーターだったので。



今もインターネットという大海の果てで木魚の音が響く。
(2000年頃のホームページ。画面上でハイテンポにお坊さんが木魚を連打する)。
当時は大量にコンテンツがあり団体の活動報告や福祉制度などの情報提供、釣り・絵画など当事者の趣味・生活のルポや、性に関する話題の掲示板もあった。

当時はサービス提供責任者の資格もいりませんでした。「推進協の〇〇さん」と言うだけで決まり。ヘルパーの資格がいりなかった時代ですからね。増田さんもOK。ただ、先生なので対外的にはアウトになっちゃう。なので、こちらが配慮した。学校の先生も入れるし、金髪高校生の石原君も入れるし。藤原さんの娘さんが学校帰りにセーラー服のまま介助に来たり、誰でもいいんですよ。

菊池：セーラー服のまま介助！

梶原：セーラー服のまま介助。セルフコーディネートしていたのはHさんやから、夕方はセーラー服だらけ。Hさんところ。

菊池：自分でセーラー服をコーディネート（笑）！その頃は同性介助とかは関係なかったんですか？

梶原：本人がセルフコーディネートしていたから。私らはあまりよろしくないんじゃないかと思ってはいたけれど、本人がそうしていた。障害を持っていた人の力が強かったから。「俺の生活だから俺が決めるんや」というのが根本にあるから、よろしくないんじゃないかと思ってもそれに従う。朝、増田さんが帰ってから午後3時頃までは主婦の方が入った。で、3時から夕方6、7時くらいまでセーラー服がずらーっと入る。で、7時になるとまた増田さんのようなおっさんが来るんですよ。

菊池：メリハリがあっていいですね（笑）。



支援費制度導入とヘルパー資格

梶原：当時は資格も何もいらない。「この人がヘルパー」と言えばヘルパーになれた。

片野坂：相談員の資格もいりなかった。誰でも相談員になれた。

菊池：資格が要るようになり始めたのは？

片野坂：支援費制度から。

菊池：2003年4月に支援費制度導入。そこからですか？

梶原：支援費までは「箕面市が推進協に全て委託」と言うことやから、何かあれば委託先の箕面市が責任を問われるということだった。だから、私らは緩かったよね。でも、支援費という契約する時代になってから、「契約するだけの会社か」ということが問われる。だから、いろんなものが出てきた。

菊池：責任をもって、資格も取って派遣して、みたいな。

梶原：そうそう。

増田：でも、僕らからすると「介助から排除された」。今まで介助でいろんな経験を積んでこれたのに、教師とかは無理になった。自分がやりたいと思っても資格がないと無理。「これは何なの？」っていう感じはしました。

梶原：資格がない人が入れなくなった。厚生労働省が大好きな激変緩和ということで3年くらい猶予を持つんですが、あの時だけですよ。急に変えたら混乱するから激変緩和で3年間は猶予をくれるんですよ。その間に資格がある人に切り替えてくださいと。

菊池：資格がない人は資格を取ってと。

片野坂：みなし資格が長いこと続いていたんとちゃいますか。

梶原：3年ぐらい。今まで入っていた増田さんが急に辞めたら障害当事者が困るでしょうから、3年間は増田さんが入ってもいいですよ。その代わりにちゃんと証明書を貰ってくださいよということで、推進協は当時、資格のない人を全員大阪府に申請して、みなし資格の札をもらった。これを持っていれば3年間どこでも入れた。支援費に変わるまで。

片野坂：あの頃、資格制度に結構抵抗してましたよね。武藤さんとかは先頭きって、まず「ヘルパー」という言葉を使うのに反対してましたよね。「介護者」という言葉にこだわっていたし。



武藤：最終的には資格を取らないとお金が出ないからやっつけいけないということになって、私ですらヘルパー資格を取りに行きました。

増田：そうそう。僕らは当時話題にしました。「武藤さんが資格を取りに行っているらしいで」って。

菊池：「あの武藤さんが?」、みたいな(笑)。

片野坂：武藤さんが資格を取りに行っていた時の講師の所属が茨木の「ぼぼんがぼん」っていうところで。そこで武藤さんが資格を取りに来た時の話を10年くらい経ってから聞いたけど、ものすごく感じ悪かったらしい(笑)。

一同：(大爆笑)!

片野坂：講師が言うことにいちいち質問する。講師が「質問ありませんか?」と聞くと、武藤さんはいちいち質問して「それは間違っている」と言ってたって。

菊池：覚えていますか(笑)?

武藤：なんとなくね。当時、入浴介護の相手が女性なんです。絶対嫌やと断ったんです。

片野坂：施設実習ですか?

武藤：どこか忘れた。断った。

一同：(笑)。

梶原：武藤さんがヘルパー取ったのも2級で、実技だけで講習は行ってないでしょう?ほとんど通信で。講習は何十時間も行かんとあかんでしょう?

武藤：相当行ってましたよ。

梶原：それは実技ちゃいます?



武藤：忘れちゃったけど。

梶原：たぶん私らは NHK の通信講座ですよ。

片野坂：武藤さんは「ぼぼんがぼん」だと思います。たぶん茨木に行って取ってはった。

武藤：それです、それ。

梶原：学科は通信で実技は絶対行かんとあかんから。なので、私は実技はこの老健とかあそびりクラブとかに行きました。でも、勉強の部分は当時行かなくても良かった。たぶん一緒に行っていたから記憶にある。武藤さんが勉強しに行っていた記憶はないなあ。私たちは一緒ですよ。NHK の通信講座でテキストが送られてきて毎月 1 回レポート提出する。それで授業を受けたことにしてくれる。最後の実技の何十時間だけは実際に施設に行かなあかん。実際に老健にも行った。

武藤：実際に行った記憶がない。

梶原：でも、資格もってはずでしょう？

片野坂：う～ん、講師の人が「やりにくかった」という話をずっとしてましたよ。「ハタから否定的態度。『取りたくて来ているわけではないという感じ』」って (笑)。

菊池：まあ、その話は置いて (笑)。じゃあ、支援費制度は障害者にとっても介助者にとっても、単純にいい制度というわけではなく、矛盾や納得できないを感じながら導入された感じですか？

武藤：支援費の方がええという人もおったんですよ。契約やナンヤカンヤした方が確実に受けられるからということ。

片野坂：介護者の幅は狭まりましたね、思いっきり。学生とかが減った。その辺の人をつかまえて入ってくれというのができなくなった。それまではビラ巻いたりしてそういうやり方をやってはったのが、支援費からはお金を払って資格を取らないと入れなくなった。あの頃は学生とかがめっちゃ入っていたのが、が一と減った。

坊野：高校生とかもたくさん入っていた……そりゃーセーラー服の子が入る方が活気があって元気になるでしょう (笑)。

梶原：学校帰りにそのまま介護に来るんやから。「介護来ましたー」って (笑)。

増田：今、高校生でも資格を取っている人がまあまあいるんですよ。

片野坂：茨木は高校生向けの介護講座をやっていましたね。

菊池：推進協に登録されているヘルパーも若い人は少ないですね。

片野坂：高校生はいるんですか？

坊野：いてないですね。大学生までですね。

増田：高校生は入れないと言われましたよ。

片野坂：今は高校生はダメなんだ。

増田：うちの娘が 3 年前くらいに取って推進協に登録しようしたら、推進協はダメだったので茨木市の北摂に行っちゃった。

坊野：個人的にはその話は全然知らないけど、どうなんでしょうね。

片野坂：高校生は行ってましたよね、推進協も。

増田：まあ、高校生はあてにならない場合も多いですからね。

坊野：大学生でも今は一人だけです。男性の大学院生が一人いるだけ。かなり高齢化というか……新しい人が入ってこない。若い人が集まっている団体には自然と若い人が集まってくるというのはたまに聞きます。推進協に今関わってくださっている方々の平均年齢が高いから、ということではないんですけど、頭の中で「若い人が来ない」が染みついているのかもしれない。今まで話を聞いていて、高校生をなぜ迎えちゃあかんのやろ？とは思いますが。

増田：責任とかが明確になると高校生は怖いというのがあるかなとは思いますが。何かがあった時にね。

菊池：責任なんですよ。話は変わりますが、支援費制度の導入が 2003 年で、9 月に 10 周年記念イベントを開催しています。記憶に残っている人もいらっしゃると思いますが。

片野坂：^{まきぐち}牧口さん (注 25) を呼んで、^{あらかき}荒木さん (注 26) と ^{いまい}今井さん (注 27) がパネラーみたいな感じで、武藤さんが結構頑張ってやってはったイベントやったと思います。

武藤：なんとなくうっすら覚えている。

菊池：通信にも武藤さんが 10 周年記念イベントのことを書いてはった。それ以降、推進協は記念イベントをやってないんですね。10 周年で止まっているというところもあるんですが。それから、2004 年 2 月に武藤さんが脳出血で倒れるということがあって、3 ヶ月の入院治療を経て 5 月に退院。このあたりは事務局内では大変だった感じですか？

武藤：自分自身が大変やった。

片野坂：何か大変だったような気がする。永田さんが辞めたのもその頃ですよ。

梶原：ちょっとその辺の前後は覚えてないんですが、武藤さんが倒れた後かな。



1枚だけ小さな画像で残っている10周年イベントの様子
左から牧口さん、今井さん、荒木さん。

片野坂：後ですねー。

菊池：武藤さんが倒れた後に永田さんが辞めた。

梶原：当時、私は森田正樹さんのガイドで毎週、東京に行っていて、ほとんど大阪にいなかったけど、東京で永田さんから電話を受けたのは覚えている。「辞めんとあかんから」って。やはり同じ年なんですね。そう考えたら大変やったね。武藤さん倒れて永田さんもいなくなって。

菊池：この話はこれくらいで(笑)。

(注25) 牧口さん：牧口一二さん。「NPO 法人 ゆめ風基金」の理事長。「障害者のイメチェンを考えて様々な活動をしてきたが、壁は厚い! (本人談)」

(注26) 荒木さん：荒木邦公さん。知的障害のある箕面市民。豊能障害者労働センターに勤め、主に機関紙「積み木」の担当をしている。

(注27) 今井さん：今井雅子さん。生後半年から箕面市に住み、1歳半のころ先天性の脊髄性筋萎縮症と診断される。地域の小・中・高校に通い、梅花女子大学で福祉学にあう。在学中の2003年2月に一人暮らしを始め、2005年より当法人でピア・カウンセラー等に8年半従事。当時の本紙『ファースト・ラン』の編集を担当していたことも。

障害者自立支援法～現在

菊池：その後、色々と流れがあって、2006年に障害者自立支援法が公布され、制度が大きく変わったのでしょうか？

梶原：支援費からはそんなに大きく変わっていないかな。自由がきいたのが支援費までですね。利用者も事業所も自由がきいていた。支援費になって縛りが強まった。支援費になって良かったかと言えば、半々とまでは言わないけど、いい人と良くない人がいた。ヘルパーに入りたい人が入れなくなったデメリットがある。障害当事者も増田さんに来て貰っていたのに増田さんが来れなくなったというデメリットがある。一方で、団体に属していなかった障害者が社協のヘルパー以外選べなかった。

菊池：う～ん。

梶原：支援費に変わる時に、社協からしかヘルパー派遣してもらえなかったその他大勢の人にとったら、「社協以外からもヘルパー派遣できるんだ。社協やめて他の事業所と契約できるんだ」というのは、一方で障害をもった人には大きなメリットがあったでしょうね。私らのような団体は、直接お金は入るようにはなったけども、ヘルパーさんと障害をもった人の関係はどんどん遠のいていったということですよ。今までに比べるとね。そういう意味ではおもしろかったとかね。アバウトでしたし。

増田：今から考えると、発言力とか行動力のある障害者の人にとってはすごくいい時代だったけど、それができない人にとっては、なかなか自立は難しかったかなという気もするので「どっちがいい」とはなかなか言いにくいですよ。

菊池：2006年10月に障害者自立支援法が公布され、2014年4月に障害者総合支援法に変わって現在に至る、というところなんですけれど。その変遷に関しては、先ほど梶原さんも、特に大きく内容的に変わりは無いって言われていましたけれど……。

片野坂：変わって以降の評価が難しいのは確かですね。措置と利用契約とかで、利用者にとってどっちがどうやったかとか、運営する側がどうやったかとか、難しいんじゃないですか？推進協的に言ったらどうなのでしょうね。2003年までは、利用者がほぼ特定の、一緒に自立生活を進めていこうっていう仲間みたいな人が中心でやってたけど、2003年以降は、いろんな人がサービスを利用したいっていう。

菊池：自分で事業所を選べるようになったし。

片野坂：この頃から、身体障害以外の人も来るようになったし。さっき言っていた当事者が自分で介護コーディネイトしてやるのかいうようなことは、僕の入った時にはもうあまり前面には出てこなくなった。それぞれサービスが提供されて、

それを利用するっていう考え方がどんどん入ってきて……行動保障みたいな、「基本的に必要なものはなんでもやっていくもんや」っていうような運動的な発想から「サービス事業者としてのサービス提供」っていうふうになってしまったので、当初の推進協がやっていた介護と、今の介護というのはだいぶ環境が変わったと思いますよ。



菊池：片野坂さんから見て、そんなに変わったと感じますか？

片野坂：そりゃ、相談事業をやって、いろんな介護派遣とか見てたら、全然違いますよ。介護保険とかをやってる事業所の中では、もっとドライに商業主義的にサービスやってるとこもあるし、そのほうが利用しやすいっていう利用者も出てきてる。利用者も消費者としてサービスを受けたいという人もいてるから。推進協の場合は、元々が重度の人の単身生活とか自立生活というのがベースにあるから「サービスを提供する」っていう発想だけでは、まかないきれへんものが多々あって。自立生活っていうのにこだわっていたのは、重度の人の地域生活や自立生活を、武藤さんとかが勧めてたから。そこは「推進協としては今どうかな？」というところはあるけど、ここ 10 年くらいのスパンで見ると、だいぶ環境が変わったことの影響は受けていると思います。まあ、自由度がなくなったっていうのが、もちろん背景にもあって。

梶原：一方で数字の話をして申し訳ないんですけど、措置から支援費になって、どこの事業所とも契約できるようになった年っていうのは、ガイドヘルプの契約が莫大に増えたんですよ。今まで推進協の利用者が 5 人やったのが、その時に一気に 30 人にも 40 人にもなったわけですね、契約やから。今までに色々運動してきた推進協っていうのがあるから、「あ、どこでもいいんやったら、推進協行こう！」っていうのが、当事者の中には多かったですよね。5 人以外でも、労働センターの人とかそよかせの人とかが、推進協と契約したっていう。で、支援費の初年度っていうのは、全国的にヘルパーを利用する人たちがすごく増えたっていうのは、数字上あるみたいですよ。で、推進協はそれですごく契約件数が増えて、お金がいっぱい入ってきたから、一泊二日の最初で最後の親睦旅行に行ったわけです。カニを食いに！カニ三昧で（笑）！

一同：（笑）。

梶原：支援費の初年度、ほろ儲け！60 万か 70 万か 80 万の経費、全部推進協が出してバス借り切って、みんなで行ったんです。それが初年度。で、厚生労働省も、「え？ここまで増えるの？」っていうことがあって、2 年目以降単価を下げたんです、ガーっと。

片野坂：支援費制度は、財政的には破たんして自立支援法に変わってるから、2 年後ぐらいに「破たんしました」って国が手をあげたんです。それは、潜在的に今まで利用しなかった、さっき増田さんが言ったような「声を上げない人たち」とにとっては、サービスの敷居が下がって、「使わな損や」ぐらいの感じでみんなが使い出したから、厚生労働省が予想してるよりうんと需要が伸びて、破たんして、単価の切り下げっていうのがきて、推進協は給料ダウンですよ。

梶原：「なんや、こんな儲かるんやったら給料上げましようや、親睦旅行いきましようや」ってガーってやっちゃったら、そのツケが 2 年目以降きて、ちょっとしばらく給料据え置きね。

一同：（笑）。

片野坂：3 年くらい昇給なしですよ。国に振り回されると言えば、振り回されてる。

梶原：最初の年だけやったよね、よかったのはね。ま、そういう意味では措置の時代よりかは、使ってる人が増えてることなんですよ。さっき、片野坂さんが言った、設立当初の推進協の運動的な要素というのは、支援費くらいからその前までは 5 人の利用者の人のことをしっかり考えていけばよかったものを、支援費になって、急に利用者が 30 人にも 40 人にもなってきたから、これはみなさん今実感しているのと一緒ですわ。事務処理に追われてそれがポーンと、日頃の仕事の中から薄れていってるっていうのはあるんじゃないかなと思うんですね。一人 10 人くらい担当してたら、誰をどこに派遣して、事務で請求上げて……事務処理でいっぱいいっぱいになってるでしょ。その中で、運動がどうのこうのと考える余裕がなくなってきたっていうのは、先ほど言った「推進協は変わってきてる」っていうところのひとつでもあると思いますね。もっと暇やったらいいんよね。

片野坂：暇でしたよね。

梶原：当時は、ほんとと、暇。

これからの推進協



菊池：最後に、この通信は全国に1,600部ぐらい冊子を発行してるんですけど、読者の方や推進協の会員の方に向けて、これからの推進協についてとか、今思われることについて、何か一言メッセージをいただけたらと思います。まず、理事長の武藤さんから。

武藤：何もないです。

菊池：何もないですか(笑)?もう言い尽くしました?

武藤：言い尽くしてはないですけど、思いつかへん。

菊池：これからの武藤さんご自身がやろうとしてることとか。

武藤：やろうとしてることって。またそんなこと言うて。とりあえず、私、長生きしたいってそれだけです。

増田：今、何歳?

武藤：59です。

増田：まだ、59かあ。

武藤：なんぼになりました?

増田：僕、55。

菊池：増田さんからは?

増田：最近思うのは、推進協というより大阪の状況がしんどいなあ、という。特に学校にいると感じるんですけど。箕面東高校の時代に、推進協ができ、若竹さんが入学したり、岸本さんが入学したりして、いろんな活動ができてね。今度転動して池田北高校に行って、折田涼さん(注29)とかが入学して、いろんな関わりがあって。で、その池田北高校は今年1年生から入学者を募集しなくなって、池田北高校とか咲洲高校が1年生が入ってこなくて、来年から今度、西淀高校と大正高校も募集しなくなる。だから結局今までは、ま、言ったら昔の「良き推進協の時代」みたいなのが高校にもあって、とりあえず定員割れで学校に入れたら、いろんな子が入ってきて、ゼロからスタートなんだけど、いろんなことを作って、卒業して、自立生活したりとか、いろんな活動ができてたのが、これからちょっとなくなるかな、という。障害のある子は、定員割れで普通学校行くんじゃなくて、支援学校行ったらいいねんみたいな、路線が引かれてきて。で、その子らが卒業したあと、どうするんやろなど。推進協とかの支援の制度を使って、そこそこ生活は順調にやってくんだらうけど、自分らが新しく何かやろうといったそういう新しい動きってというのがこれから起こるのかな、というのがすごく心配というか、「期待できないかもな」というのがあって。社会状況がそう

なっていく中で、推進協がもっと、昔みたいな気持ちで新しいことを何か仕掛けたりみたいなのがあったら、うれしいな、みたいな。そこが推進協の魅力だろうし、障害者を事務的に支えるんじゃなくて、当事者主体みたいなところを持ち続けて、そういう長い歴史が箕面にあって、それを引き継いでいってほしいな、という。

菊池：ありがとうございます。片野坂さんは?



(注29) 折田涼さん：NPO 法人ポムハウス代表理事。1989年生まれ。人工呼吸器をつけて地域の保育所、小・中学校、高校に通い、現在は一人暮らし。喀痰吸引等研修の講師や医療的ケアは生活支援行為であることを広く知ってもらうために全国で講演活動を行っている。

片野坂：そうですね。僕は最初から関わってるわけではないので、今日改めていろいろ話を聞いて、推進協がいろんなルーツというか、Hさんの話とか、制度がない頃の話とかを聞くと、逆に、今の状況が必ずしもいいことばかりではないと。サービスがお客様主義みたいな、利用する側もお客様化してるし、サービス提供する側も、サービス業化してる中で、いろんな矛盾というか問題が起きていると。日々、相談業務で経験するので、なかなか現実難しいですけど、やっぱり推進協がもともと持っていた、そういう「行動保障していこう」とか、「当事者主体で生活を組み立てていこう」とか、今の時代でも必要なんだな、というのは自分自身が現場で感じるのがすごくあるんですけど、それをどう実践していくかというのは、難しい場面が多いので。少なくともそれは、自分自身も持ち続けたいし、推進協の後に続く人にも、活動なり、増田さんの期待にも応えられるようなところを、持っていきたいなと思いますね。単純に時代が変わったから今はこういうやり方で、ということではないものが推進協の歴史の中にはあるので、それは大事にしたほうがいいかなと、今日は思いました。

菊池：ありがとうございます。最後に梶原さん。

梶原：私も、今、片野坂さんが言いはったのとはほぼ同じですね。昔の推進協というのは、推進協をなんとか安定させようと、いろんな事業を受託しようと、推進協が主体となってやる事業をひとつでも増やそうと、進めてきた。設立から支援費へと。それが一定、かなってやっぱり増田さんや片野坂さんが言ったように、もう一回原点に戻る部分が必要なかなと思いますね。事業は事業で、ちゃんと契約して受託してるんだから、それはしっかりやらんとあかん、決まりの中でね。それは当然のことだと思いますけどね。それ以外の「独自の事業」ということでね、何か障害を持った人の自立とかなんとかに、つながるね。自立するというふうなことを、これから推進協がまた、一事業としてやっていくっていうのが必要で、ありかな？と思いますね。今は全部、支援法とか、送迎でも、福祉有償運送とかね、全部法律にのっとった中での事業なんですよ。言うたら通信ぐらいですよ、自由なのは。通信は、なんの制度にものっとらないでしょ？ 関定協（関西定期刊行物協会）から番号もらってるだけでしょ？ あと何もないでしょ？ だからそういう自由なところで動く推進協っていうのを、逆に広げていかんとあかんの違うかな～。それが、本来の推進協の目的であるところの、障害をもった人の自立につながるようなことができたらいいなあ、というふうに若い人には託したいな、と思ってます。でも今回ね、一回、この支援費までのお話っていうのを、後から入られた方にはね、どっかでしたいなと思ってたんですよ。増田さんみたいな人がおったんですわ、Hさんみたいな人がおったんですわ、みんな上納金で上げてやってた人たちがいたんですわ。それが何も「金くれ～」「もらってない」とかね、「なんで働いてるのに、ヘルパー料くれへんねん」とかね、そういうこと言う人が一人もいなかった時代があった。そういう人たちの志で障害を持った人たちの生活が成り立ったところですね。時代をお伝えできたらな、というね。そういう障害を持った人もいた、「俺のどこ入れや。来てくれや。おれへんのや、誰も。来てくれ、来てくれ」ってね。ピラまいてたりね。障害を持った人自身がね。若竹さんもピラまいて、最初の時なんて。そういうのを見て、誰かヘルパー紹介してあげようとか、僕の友達、私の友達っていうことで、つながりができて。それが活字で終わってるというのが……。活字っていうのは、求人募集で終わりですよ。寂しいなと思います。長くなりましたけど。

菊池：今日は皆さん、ありがとうございました！



●推進協座談会あとなぎ

第一部のはじめに、この企画を考えた意図の一つとして「当法人の未来を考えた時に皆でルーツを共有しておかないと『いつか、僕らは先に進めなくなる時がくるのでは?』という漠然とした不安がある」と語りました。座談会の中でも「もう一度原点に戻る部分が必要なのでは」という話がでてきます。まさしく、当法人はこのように原点に戻り未来を考えないといけない転換期を迎えようとしていると思います。この座談会は、あくまでそれを考えるキッカケであり、本当に原点に戻り考えていかないといけないのは、これからです。まずは先輩方のお話を聞くことができましたが、一方的に話を聞くだけで終わらずに、世代や年齢や立場を超えて相互に意見や思いをやりとりしながら、一歩ずつ皆で歩いていけたらと願います。

今回の推進協座談会第一部と第二部の制作に協力していただいた、参加者や各関連事業所の皆様には何度もやり取りさせてもらいながら、長い時間をかけてお付き合いいただき、感謝の言葉もありません。また、日頃、当法人を応援していただいている会員の皆様や本紙の読者にも、御礼申し上げます。この企画は、たくさんの方々のご協力があって、完成できたものです。ページ数が多い事もあり、通信スタッフでうまく編集することができたか不安はありますが、座談会参加者の熱や思いは十分に伝わるものになったと自負しております。

では、第一部の「はじめに」の冒頭と同じ言葉で、この座談会を締めくくりたいと思います。

「みな、きちんと語ろうとするときは聞く者がいないし、真剣に聞きたいときは語る者がいないのだ」

(『先生のおさがお』^{なまげいし}南木佳士著より)



進行／菊池康治

編集・レイアウト／菊池康治・坊野一乗

撮影／坊野一乗・大野永美子

記録／小山加代・坊野一乗・大野永美子・福永英司

書き起こし／菊池康治・小山加代・坊野一乗・大野永美子・福永英司

2016年度対市交渉報告

毎年行われる箕面市の対市交渉の報告を今年もダイジェストで報告いたします。対市交渉とは、行政と障害者団体が一緒になって、障害者が生活する中で抱える問題を協議して改善の方向に持っていかうとする場です。今年度の対市交渉は2016年11月21日・25日の二日間に渡り行われました。

内容は「くらすこと・はたらくこと・人権と教育」についての主に3部門に分かれ行われました。

3部門毎に内容を報告いたします。

【くらすこと】

障害を持った方の入院時のヘルパー派遣・ヘルパー派遣時の週の入浴回数上限の撤廃・移動支援の柔軟な利用・グループホームの消防設備設置費用の支援など、様々な問題について話し合いがありました。内容によっては、箕面市行政ですぐに対応できること、大阪府及び国制度により改善に時間を要することなど様々ですが、現状の課題をお互いが再認識できたと思います。この課題に対して、いつどのタイミングで課題解決の進捗状況を確認するのが問題と思われる。

【はたらくこと】

今回の交渉では、市の健康福祉部障害福祉課の陣容が大きく入れ代わったこともあり、あらためて、障害がある人もない人も共に働く箕面のあり方や制度の理念についてお互いに確認する時間をとりました。特に、団体側からは、障害当事者が実際にともに働く場からの強い思いをお伝えしました。事業にかかわる責任感、大きな喜び、不安と日々の取り組みなど、会場全体でその切実な声を受け止めたと思います。

市の担当課からは、その内容をしっかりと受けとめ、着実に努力する旨の表明がありましたが、今後は、担当課と団体側が協議の場を通じて、財政的制約を理由に立ち止まるのではなく、構築的視点で課題の解決にあたることが求められます。

【人権と教育】

・人権について

2015年、2016年に起こった障害者等に対する差別落書きを受け、「差別事象対応マニュアル」が作成され、庁内各部局の初動対応等が周知されたことは一定評価できました。しかし、市民全体で考えていく取り組み姿勢は見られず、障害者市民自らが声をあげていく必要性を強く認識することになりました。

・教育について

保育所民営化、民間の放課後デイの急増により、支援が必要な子どもが「分けられる」ことのないよう、今後注視すべきとなりました。いじめに関しては、一部の教員が抱え込むことなく早期に他の教員、保護者と連携することが課題になりました。また、担当教科を持たない「動ける教員」を配置するパイロット校が指定され、子どもと向き合える時間を作る試みについて、検証が重要となりました。

以上となります。次年度もまた、課題解決にむけて取り組んでまいります。



箕面市^{かやの}立萱野中央人権文化センター（らいとぴあ）にて今年も開催されました。毎年市内の施設に各障害者関連団体と障害当事者やそのご家族、箕面市の各部・各課の職員が一堂に会し、障害のある方々が箕面市内で、より「あたりまえ」のくらしを実現していけるよう、生活・福祉制度・就労・教育など多岐にわたる問題や課題を話し合っています。箕面市内にお住まいの方々ぜひ来年度もお越しください。

カエルのうた

其の 15 ～バリアフリーは何のため



車イスで生活をしていると、色々不便なことや困ったことに会うことが多い。地域によっては景観のためか道路をアスファルトで舗装しないで、デコボコのタイルのようなものを敷き詰めている所がある。そこを通ると車イスがガダガタと振動して、壊れるんじゃないかと思う時がある。腰にも響いてかなり痛い。車イスの人が通るなんて滅多にないからそうするんだろうと思うが、アスファルトにしないんならせめて振動しないものを選んで欲しい。道路の整備に関わっている人が、一度車イスに乗ってそこを通ってもらえれば分かるんだと思うけど。そんなことしないだろうな。いやいや諦めたらいけませんね。是非車イスに乗って通ってみてください。

家の近所にある定食屋さんの階段につけてある手すりもひどい。見た感じ 50 センチぐらいの高さしかない。あの高さの手すりを使う人がいるのだろうか。あの手すりをつけた人は素人ではないだろうし……いや、ひょっとして……。とにかく障害を持った人や、高齢の人が来ても使えないのは間違いないと思う。店を作る時の決まりに「階段には手すりをつけること。ただし高さは自由」なんてあったのかな、使えない手すりなんて意味無いと思うけれど。それとも自分の店には手すりを使う人は来ないとでも思っているのかな。

近くのレストランもそうだ。階段に手すりは付いているが、その手すりに旗がくくり付けてあって、それが邪魔でかなり利用しにくい。階段があるということで多くの障害者や高齢者は行かないと思うが、中には私のように手すりを利用すればなんとか入れる人がいるだろうし、せめて手すりぐらいは使えるようにしておいて欲しいものだ。

バリアフリーについて「あーなれば良い・こうなれば良い」と思うことはよくある。しかし、そうっていない所でも、人的サポートでなんとかなる所もある。私が定期的に行ってる歯医者さんの扉を開けたら 15 センチぐらいの段差がある。最初行った時に段差を見て「こりゃあダメだ帰ろう」と思った瞬間、奥の部屋から先生が出てきて「抱えるけどどうしたら良い」と聞かれた。私は「立ちますので車イスを上にあげていただけますか」と頼んだ。なんとかなったので、それ以降ずっとその歯医者さんを利用している。ハード面のバリアフリーは絶対に必要だが、ソフト面のバリアフリーこそ、より必要だとその時に改めて思ったことを思い出す。いろんな問題があって完全にバリアフリー化することは難しいと思う。しかしそこに心ある人が居れば、なんとかなる場合も多いように思う。

(武藤 芳和)

NPO 法人 箕面市障害者の生活と労働推進協議会

当法人は1993年に障害者の「地域での自立生活」「地域で共に暮らす」を理念のもと設立しました。

常勤スタッフ & 登録ヘルパー 大募集!!!



障害があっても自分らしく暮らすために

わたしたちは地域でともに暮らす仲間をサポートしています。

❗ 人として学び、成長したい! 能力を発揮したい!

❓ ちょっと自信がないけれど…?

待ってるよ!



仕事上の悩みや困りごとに対しては、
スタッフが十分にフォローする体制をとっています。

NPO法人 箕面市障害者の生活と労働推進協議会

〒562-0001 大阪府箕面市箕面4-8-30

TEL: 072-723-3342 FAX: 072-723-6506

e-mail: JDW07270@nifty.com

● 阪急箕面線 箕面駅下車 徒歩15分



常勤スタッフ募集 ★女性スタッフ(同性の介助のため!)を特に募集中!

i 障害のある方の「あたりまえの日常生活」をサポートするお仕事です。
 職務内容 ● 年齢・資格不問(資格取得など支援制度あり)

🕒 変形労働制: 基本10:00~18:00 (内、1時間休憩、月1,2回泊まり勤務あり)
 勤務時間

¥ 例) <35歳・既婚・子ども扶養> 月給 24万8千円くらい(目安)
 賃金 ※当事業所規程による年齢・経験を考慮します。

! 試用期間あり・社保法定福利完備・交通費全額支給
 その他

ここで一緒に!



登録ヘルパー募集

i 障害のある方の「あたりまえの日常生活」をサポートするお仕事です。
 職務内容 ● 年齢不問(正社員登用制度あり・資格取得貸付制度あり)

¥ 時給 1,400円以上(目安:夜勤1回出勤で1万円以上。)
 賃金

! 試用期間あり(試用期間中:時給900円)・交通費補助あり
 その他

● その他、ご不明点等はお遠慮なくお問い合わせください。(担当:安東)

資格がない方でも条件が合えばサポートできます。
 (定期的に資格等の講座も開催しています。)

あなたのライフスタイルに合わせた働き方で大丈夫です。

例えば  早朝のみのサポート。  夕方・夜間のみのサポート。

休 土曜・日曜・祝日のみのサポート。 などなど、ご相談に応じます。

ヘルパーの生の声 (やってよかった!と感じたとき、難しいと感じたとき。)

- ☺ 利用者さんから「ありがとう」と心のこもった言葉をかけられたとき。
- ☺ 「ありがとう」と何でもない仕事で言ってもらえるところ。
 一対一なので、その方お一人を集中して大切にできるところ。
- ☹ 相手は日々感情も気分も当然変わる人間であること。いつも同じではないという対応の難しさ。

編集後記 ~こんなメンバーであんじょうやりました~

・先日、私が担当しているグループホームの入居者さんに、私の誕生日が3月である事を話すと「別れの季節が誕生日って寂しいね~」って言われた。そう言えば、誕生日の日が終業式だったり卒業式だったりすることが多かったなあ。学生時代の記憶が呼び戻され、ちょっと切なく甘酸っぱい気持ちにさせられたよ！（職員K）

・去年の秋、前から欲しかったオイルヒーターを購入した。が……かなり電力を消費するのか夜に子供が部屋に戻り暖房をつけるとヒューズが飛ぶ。そのたび私は真っ暗の中、懐中電灯片手にブレーカーを戻す係になる始末。そんなこんなで結局元のファンヒーターで過ごした冬だった(-ω-)（職員K, K）

・前号から2号ブチ抜きでお送りした座談会、いかがでしたか？「今の職員はどれだけ昔のこと知ってんだよコラ？」と参加されている方々からダメ出しいただくこともあったんですけど「なにせ初耳なもんで仕方ねえ！」的なものがほとんどだったので、形にできて本当によかったです。一方、個人的には目の前のことに一生懸命になってるとどうも「伝承」や「継承」がオロソカになると感じる事が多く。そうはしたくないのですが、そもそもお相手=年齢層が下の世代の方々に全然お会いできなくてヤバイヤバイ言ってます。5年後はなんとなく想像がつくけど10年後はどうか……あまり想像つかないです。あと「人」も必要ですけど「酒」も……酒の絶対量も足らんのではないのでしょうか。そうだ酒に違いない！酒の摩訶不思議なパワーを借りて、色々な方々と泣いたり笑ったり、くんずほぐれつしたりとかが必要なのは！5年前の入職当時まだ20代後半だった自分としては最近、肌が水を弾かず、きもち吸収するようになってきた気がしてきていることも地味にヤバイ。お肌も人間関係も元気に保てるよう、しっかりケアやターンオーバーをしていきたいものです。
(びーどろ)

・私が担当する女性のグループホームが、開所してもうすぐ1年になります。山も谷もありすぎてジェットコースターみたいな1年でしたが、みなさんに支えられ、無事に一周年を迎えられそうです。ホッとすると何かやっつけてしまいそうなので、このまま二周年をめざします！（職員O）

・このところ週末の滝道ウォーキングが定着。春の桜や秋の紅葉は言うに及ばず、結露に凍る冬の滝道も一見の価値あり。なんと先々週は鹿、先週は猿にも遭遇。季節感、そしてサプライズも満載、やめられませんね。
(職員F)



当法人の応援をお願いします！【会員募集】

当法人「箕面市障害者の生活と労働推進協議会」(略して推進協)は「障害者市民の権利および自立生活の促進」を理念に掲げ、活動しています。当法人を応援して下さる会員を募集しています！

現在、当法人では主に下記の活動を行っています。



ヘルパー派遣事業

地域で自立生活を営む障害のある方々に向けたヘルパー派遣を行っています。「居宅介護」や「重度訪問介護」などの在宅支援、障害の特性にあわせた「同行援護」「移動支援」などのガイド支援を行っています。



グループホーム事業

障害者市民の自立生活の一つとしてグループホームを市内で運営し、地域生活を支援しています。入居者の自主性を大切にし、その人の個性をよく見てできることは自分でしてもらい、できないことは少しずつできるように世話人が支援をしています。



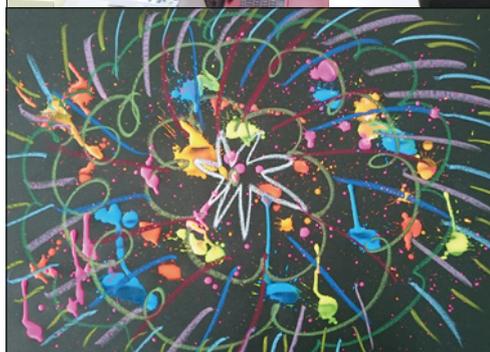
地域交流センター事業

放課後、長期休暇中の活動保障として障害がある子どもや地域周辺の子どもたち、および市民が交流する場「さんかくひろば」を運営しています。また、保護者等に対する相談も行っています。



相談支援事業

障害者市民の自立生活への援助・アドバイス・情報提供を目的として、きめ細かい相談業務を行います。また、より多くの市民と共に将来の施策のあり方について検討を行います。



その他の幅広い活動

当法人独自の事業として移動困難者の支援を行う送迎サービス、当広報誌『ファーストラン!』の刊行、ヘルパー養成の研修やアートサークルの運営なども行っています。

今後も障害のある方々にとって暮らしやすい社会づくりにむけた活動を継続していきます。より一層のご支援・ご協力をいただきますようお願い申し上げます。つきましては、**一人でも多くの皆さまに、当法人理念および活動方針の賛同者であり応援者でもある「会員」になっていただき、当法人の活動を応援していただければと願っています。**



■ご入会について■

入会希望の方はご一報ください。入会申込書を送付いたします。会員の種別は下記の3種類となっています。

団体会員 会費	: 1口 10,000円
個人正会員 会費	: 1口 3,000円
個人賛助会員 会費	: 1口 1,000円

※団体会員・個人正会員は年に1回開催される総会に参加でき議決権があります。個人賛助会員に議決権はありません。

また、団体会員と個人正会員の議決権は1つで、口数には比例しません。

(口数が増えても議決権は増えません)。

当法人公式サイトからもお申し込みいただけます！下記のページにアクセスしていただき、画面の案内にそって必要事項を入力のうえ、お申し込みください。

<http://www.suisinky.com/members>

■お問い合わせ先■

072 - 723 - 3342 (会員担当: ^{きのした}木下)

みなさん、推進協の応援団、会員になってください！お願いします！

当法人について

当法人は箕面市内で様々な活動を行っています。

ご依頼・ご相談は電話・FAX・Email・公式サイトよりお問い合わせのうえ、各事務所へお越しください。

●法人本部 (第1事務所)●
 NPO法人 箕面市障害者の生活と労働推進協議会
 〒562-0001 大阪府箕面市箕面4丁目8番30号
 営業時間：月曜から土曜 午前10時から午後6時
 TEL：(072)723-3342 FAX：(072)723-6506
 Email：JDW07270@nifty.com
 Website：http://www.suisinkyo.com/
 お花屋さんの奥に入ったところにあります。
 居宅・重度訪問・移動支援・同行援護等のヘルパー派遣事業や
 グループホーム事業・通信発行事業をおもに実施。

●法人支部 (第2事務所)●
 地域交流センターさんかくひろば
 〒562-0004 大阪府箕面市牧落3丁目2番15号
 営業時間：月曜から土曜 午前10時から午後6時
 TEL：(072)734-6833
 FAX：(072)720-6835 Email：mintlife@big.or.jp
 Blog：http://www.suisinkyo.com/sankakublog
 地域交流センター事業・放課後等デイサービスを実施。

●法人支部 (第3事務所)●
 相談支援事業所ライフタイムミント
 〒562-0004 箕面市牧落3丁目2-26
 グリーンみのおA棟101
 営業時間：月曜から土曜 午前10時から午後6時
 TEL：(072)720-6806 FAX：(072)720-6808
 Email：mintlife@big.or.jp
 相談支援事業・送迎サービス事業を実施。

編集／特定非営利活動法人 箕面市障害者の生活と労働推進協議会

〒562-0001 大阪府箕面市箕面4丁目8番30号 電話：072-723-3342 FAX：072-723-6506

Email：JDW07270@nifty.com 郵便振替：00990-4-116066 公式ウェブサイト：http://www.suisinkyo.com

発行人／関西障害者定期刊行物協会 大阪市天王寺区真田山2-2 東興ビル4階